一時も早く此壁
罪はほどけて天上に
忽ち平癒さしてたべ
なぜ此足が惡いだろ
深いめぐりが來たのだろ
轉輪王ではなけれ共
地にます神様よ
完美に委曲にきこし召し
私もこんな男をば
旅は道伴れ世は情

異の池の龍神の
立歸りました其如く
腰から上はどうもない
ヤッパりあしき事をした
惡きを拂うて助け玉へ
天にます神様よ
カールが代つて御願
早く助けて下さりませい
連れにするのは厭なれど
神の戒め怖い故

せうことなさに介抱する
これは私の冗談だ
冗談からは隙が出る
一時も早く石熊に
出る樣に守つて下さんせ
キッと入口あるであろ
早く追ひ出し下さんせ
足を痛めた足引の
長々しくも何時迄も
どうで罪をば重ねた男

オットドッコイ石熊さん
瓢簞からは駒が出る
灰吹きからは蛇アが出る
憑依致した惡靈が
此奴の體に這入つた以上
出口の神さん一時も
百人一首ぢやなけれ共
山鳥の尾のしだり尾の
斯うしてゐては堪らない
御無禮の數々いつとなく

盡しましたで御座いませう　お腹の立つのは尤もぢや
併し神様私の　願を容れて腹立てず
足の立つよにしてお呉れ　夜明けに立つは○○ぢや
親と一度に生れたる　伴は美ん事立つなれど
此奴の足はどうしてか　容易に立たうと致さない
如何なる罪があらうとも　今度計りはお助けを
たつて御願申します　こりや又不思議何時ぞ間に
俺の一方の長い足　誰が盗んで歸んだのか
いつの間にやら兩足が　高低なしに揃うてゐる
かうなる上は俺とても　採長補短の融通は

コレから利かすこた出來ぬ　いやまて暫し待てしばし
そんな不足は云はれない　これも尊き神様が
一方の足を縮めたか　但は一方を伸ばしたか
何ぢや知らぬが嬉しいぞ　心もカールなつて來た
石熊さんよ！　これ見やれ　誠が天地に通じたら
一生病のド跛も　いつの間にやら神さまが
頼みもせぬのに氣を利かし　チャンと直して下さつた
お前の足は眞直に　長い短いない足だ
こんな所で腰ぬかし　立つも立たぬもあるものか
氣を引立てゝ立つてみよ　三五教の御教に

經と緯との御仕組　　艮鬼門金神の
氣勘に叶うたことなれば　　錦の綾の機をあげ
天晴れ神の太柱　　下つ岩根に立て通し
上つ岩根につきこらし　　信仰の德をつむならば
どんな惡魔もたてつかぬ　　立てよ立て〳〵早く立て
立てと云ふたら立たぬかい　　お前は餘程腰拔だ
巽の池の龍神の　　あの勢に僻易し
肝玉つぶして腰をぬき　　アタ耻かしい荒男
腰をぬかして何とする　　俺のぬかすは口計り
何時もグズ〳〵吐ス奴　　默つて居れよと何時の日か

俺を叱つたことがあろ　　あゝ惟神〳〵
叶はんなれば立あがれ　　性のよくない此病
耆婆鶴鵲が現はれて　　忽ち直して呉れまいか
俺の言靈立所に　　御兆候がなければならぬ筈
耻し乍ら是程に　　言靈車を運轉し
きばつて見れどまだ立たぬ　　立つた〳〵〳〵〳〵ラッパ節
法螺貝吹いた其酬ゐ　　こんな憂目に合うのだろ
龍代の姫の神さまよ　　お前の水火に生れた子
なぜに立たして下さらぬ　　私は痛うも痒ゆもない
さは去り乍ら心の中は　　ホンに齒痒い痛ましい

マラソン競爭

いたつて口のやかましい　此石熊も今は早
往生致して居りまする　最早慢心致すまい
改心記念に今一度　足が立つよに頼みます
衝き立つ船戸の神様の　御名を負へる此杖を
力にチョッと立つて見よ　あゝ　惟神　々々
どうして是程お前の病　しぶとう直らぬ事だらう
末子の姫の御一行　立つて行かれた其跡で
氣が氣でならぬ二人連れ　神さんたつて頼みます
オイ〳〵石熊立つて見よ　立つて立てない事はない
お前の心を引立てゝ　誠の道を立て通し
猜疑の心を絶つならば　キッと此足立つだろう
たつからお前を眺めても　横から見ても氣にくはぬ
ハラの立つよなスタイルだ　これでは役に立つまいぞ
ヤレ立てソラ立て早う立て　ドッコイ〳〵ドッコイショ
轉けつ輾びつ氣を引立つて　カールの後に跟いて來い
最早俺さんは立つ程に　石熊さんよ御ゆつくり
そこで御隱居なされませ　お腹が立つかは知らね共
立たねばならぬ此場合　早く歸りて姫様の
お役に立つが俺の役　サア〳〵行かうサア行かう
ドッコイ〳〵ドッコイショ　ウントコ立つたり石熊さん

氣張つて立つたり石熊さん　左のお足を一寸屈め
右の御足を一寸屈め　神さま力に立つて見よ
立つに立たれぬことはない　心一つの持樣だ
さらば〳〵」と立歸る　後に石熊只一人
石熊「オイ〳〵カール待つて呉れ　俺達一人をこんな所に
捨てゝおくのは胴慾ぢや　こんな無情な事されて
腹が立たずにおかうかい　腹が立たずに濟むものか
殘念至極思ひ知れ」　無念の齒がみし乍らも
怒りにまぎれて兩足の　痛を忘れて立上り
「コラ〳〵カール一寸待て　貴樣は誠に濟まぬ奴
コレから素首引拔いて　命を取らねばおかうか」と
尻ひつからげドン〳〵と　カールの後を追うて行く。
あゝ惟神々々　神の御靈の幸はひて
カールの願も龍代姫　完美に委曲に聞し召し
助け玉ひし有難さ　足の立つたる石熊は
始めて天地の神德を　悟ると共に逃て行く
カールの心を能く悟り　忽ち兩手を合せつゝ
「コレ〳〵カール待つて呉れ　お前のおかげで立ちました
忽ち神德現はれて　俺の體は此通り
決してお前を恨まない　一口お前に追ひついて

今の御禮が申したい
聲を限りにドン〳〵と
カールは後を振返り
カール「こゝまで厶れ早厶れ
ウヅの都に末子姫
首を伸して待つて御座る
話する間があるものか
ウヅの都でトックリと
詳しう説明してやろう
御靈幸はひましませ」と
たつて頼みぢや待つて呉れ」
後おつかけて走り行く
甘酒飲まして上げませう
捨子の姫の兩人が
お前の樣なヒョットコに
用があるなら從いて來い
お前の合點が行く樣に
あゝ　惟神々々
二人はマラソン競爭の
決勝點を競ふよに
阿修羅の荒たる勢で
これぞカールが大神に
實地に活用致したる
いよ〳〵茲に兩人は
互に胸を打割つて
涙と共に語り合ひ
あゝ　惟神々々
大地を威喝させ乍ら
進み行くこそ勇ましき。
敎へられたる神策を
千變萬化の働きぞ
ウヅの都に安着し
慈愛の神の御心を
感謝するこそ畏けれ
御靈幸はひましませよ。
（大正一一、八、一五、舊六、二三、松村眞澄錄）

第一三章　都入（八五五）

異の池の曲神を
言向け和し末子姫
燒きつく如き炎天を
春、幾、鷹に送られて
再び山を乘越ゑて
旅の枕も數重ね
三五敎の神館
漸く進み來りける。

神の伊吹の言霊に
捨子の姫を從ひて
かよわき足を運びつゝ
草野をわたり河をこゑ
又もや谷間を辿りつゝ
桃上彦の鎭まりし
ウヅの聖地の間近まで
松若彦は馬に乘り

御輿二挺を舁つがせつ
神素盞嗚大神の
捨子の姫を迎へんと
赤き十曜の紋を染め
長蛇の陣を張り乍ら
カリナの里に現はれぬ
末子の姫の一行と
忽ち馬を飛び下りて

松若彦「珍の都の國彦が
松若彦は今茲に

數多の國人引率し
珍の御子なる末子姫
威儀を正して白旗に
風に靡かせ堂々と
ウヅの都の町外れ
松若彦の一行は
カリナの里に出會し
末子の姫の前に寄り
御子と生れし神司
瑞の御靈の末の御子

末子の姫や捨子姫
神の御告に知らされて
茲にお迎へ申したり
尊き御身を持ち乍ら
世人の爲とは云ひ乍ら
指折り數へて國人が
今か〳〵と待佗て
尊き珍の姫樣よ
茲にてお休み願ひます」
いと懇懃に宣りつれば

御二方の御出ましを
新に御輿を造り上げ
殊更暑きウヅの國
神の御爲道の爲
よくも御出まし下さつた
瑞の御靈の御降臨
喜び勇んで居りまする
從ひませる捨子樣

末子の姫も會釋して

末子姫「噂に高きウヅ館
我等一行を親切に
春、幾、鷹の御三方
よくも遣はし玉ひしぞ
いよ〳〵此處へ着きました
尊き神の引合せ
メソポタミヤを立出でて
數を開く折柄に
虐げられて棚無しの
さも恐ろしき荒波に

松若彦は汝が事か
テル山峠の麓まで
迎への爲に遙々と
おかげで道中恙なく
あゝ惟神々々
はてしも知らぬ白曇の
バラモン教の司等に
我等が姉妹主從は
寄るべなきさの捨小舟
つき放されし苦しさよ

妾は幸ひ天地の
捨子の姫と諸共に
テル山峠を乗越にて
大蛇の神を服従はせ
松若彦の現れませる
いよ〳〵此處に現はれぬ
妾は未だ手弱女の
何卒宜しく頼み入る
神の教に服従へる
始めて述ぶる御挨拶

神の恵を蒙ぶりて
ハラの港に安着し
巽の池に潜みたる
心も勇み身も勇み
ウヅの都を當途とし
松若彦の神司
力少きまな娘
あゝ惟神々〳〵
教司の御前に
完美に委曲に聞し召せ」

言葉靜かに宣りつれば
揉手し乍ら喜んで
力の限り握りしめ

松若彦「あゝ姫様よ〳〵
汝が命の降臨に
戸ざゝぬ御世と治まりて
吹かれて散りて影もなく
輝き渡り玉ふべし
神の御末の末子姫
松若彦が赤誠を

松若彦は腰屈め
末子の姫の御手を取り

いよ〳〵是よりウヅの國
いと平けく安らけく
鬼も大蛇も荒風に
神の御稜威はいやちこに
あゝ惟神々〳〵
珍の身魂の御前に
捧げて感謝し奉る」

と互に挨拶を終り、麗しき森蔭に立入りて、少時息を休むる事となつた。

松若彦は詞丁寧に、末子姫、捨子姫に向ひ、腰を屈め乍ら

松若「噂に高き瑞の御靈、神素盞嗚大神樣の珍の御子と現れませる末子姫樣、並にお付添ひの捨子姫樣、よくマア遙々と此熱國へ御降臨下さいました。私は申すに及ばず、ウヅの都の神殿に仕へ奉る神司を始め、數多の國人はどんなに喜ぶことで御座いませう。全く私は救世主の御降臨と欣喜雀躍の餘り、二三日以前から、餘りの嬉しさに夜も碌々に休むことも出來ませなんだ。餘り俄に拵へました此御輿、お粗末では御座いますが、どうぞ是から、これにお乘し下さいまして、御入城の程偏に希ひ上げ奉ります」

と賴み入る。末子姫は首を左右に振り、

末子「折角の思召、無に致すは誠に濟まない譯で御座いますが、勿体ない、結構な神樣より、足を頂戴致し乍ら、どうして輿なんかに乘ることが出來ませう。折角乍ら是計りはお許し下さいませ」

捨子「姫樣もあの樣に仰せられまするから、どうぞ是計りは御無用にして下さいませ。又妾は姫樣の侍女として、お側近く、朝な夕なに御奉公致す婢女なれば、假令姫樣が御乘しになつても、妾は左樣な勿体ないことは、到底出來ませぬから、惡からず御收め下さいませ」

松若「左樣では御座いませうが、あなた樣の御降臨を國人が喜び、寄つて集つて晝夜の別なく作り上げた御輿で御座いますれば、どうぞ國人の至誠に免じ御乘用し下さいます樣、一同に代り、たつて御願申上げます」

末子『頑固のようで御座いますが、妾の樣な若い女、神德もない者が、如何して此樣な立派な、神樣の御召し遊ばす御輿に乘せて頂くことが出來ませうか』

松若『貴女樣は神樣の御經綸に依つて、ウヅの國の司として御出で遊ばしたので御座いませう。貴女樣に取つては左樣な事は御考へ遊ばさないでせうが、正鹿山津見の神樣が、黄泉比良坂の戰ひに、御出陣の際、私の父の國彦に向つて仰せらるゝ樣……神素盞嗚大神樣の姫御子が此國へ降臨遊ばして、宇都の國一圓をお治め遊ばす時が來るから、それ迄は汝國彦、我館を預り能く守り居れよ、珍の御子降臨の時は、是を奉じて國の司となし、汝は左守右守の神となつて、神業に奉仕せよ……との御敎示で御座いました。我父は最早國替を致しましたが、其後を繼いだ此松若彦、父の言葉を無疎にも忘れず、珍の御子の降臨あるまでは、大切に守らねばならぬと、今日まで力の及ぶ限り守つて參りました。貴女はいよ〳〵此國の女王となつて、國民を治め、又敎主となつて國人を尊き神の御道に敎へ導き下さらねばならぬ御役目で御座います』

末子『及ばぬ乍ら、其使命は妾も父大神より承はつて居りました。何卒宜しく御輔導の程を御賴み申します』

松若『御勿体ない其お言葉……松若彦身に取り、實に無上の光榮（ホのーロ）に存じます。至らぬ愚者なれ共、宜しく御指導下さいまして、永くお使ひ下さりませ。偏に願ひ奉ります』

末子『御互樣に宜しく願ひます』

松若『あなた樣は父大神より、此國の女王とならせ玉ふことを御存じとあらば猶更の事

此御輿に御乘し下さらねばなりますまい。決して御輿にお召し遊ばすのは贅澤の爲でも、又は樂に道中を遊ばす爲でも御座いませぬ。此世界は天地の御恩に依つて造られた以上は、天はさて置き、地には至る所に國魂神の神靈宿らせ玉へば、大地の上を踏み歩くも、我々人民は恐れ多い次第で御座います。ぢやと申して、國人一般が大地を踏むことを恐れて居りましては、道行くことも出來ず、耕し一つすることも出來ませぬ道理、そこで國の司と現はれます女王樣は、萬民に代り、天に踏まり地に跼して、神祇を尊敬遊ばし、國民の代表となつて、お土を御踏み遊ばさないのが御天職で御座いますから、どうぞ此處の道理を聞分け下さいまして、これより先は城下で御座いますれば、せめて城下丈なりと、お土をふまない樣に、我々に代つて御苦勞に預りたう存じます。又捨子姫樣も御近侍の役、どうぞ姫樣に御伴遊ばすので御座いますれば、此御輿に是非〳〵御乘しを願はねばなりませぬ。此儀偏に御願申し上げます」

末子「そう承はらば、否むに由なきことで御座います。左樣ならば仰せの通り、御世話になりませう。……捨子姫殿、妾が許します、否命令します、あの輿に乘つて妾が後に從ひ來られよ」

と漸く末子姫の言葉は何處となく權威を帶びて來た。捨子姫は否むに由なく、素直に「ハイ」と答へて、末子姫の輿の後より外の輿に乘せられ、數多の國人の歡呼の聲に送られ、賑々しく入城することになつた。

ウヅの都の入口には非常な立派な門が建てられてある。末子姫は此表門より輿に昇つがれ、行列勇ましく本城さして進み入る。通路は白砂を布き詰め、道の左右には數

多の國人、地上に跪き、救世主（サヴォーント）の降臨と涙を流し、感喜の眞情に暮れてゐる。いろ〳〵の音樂の音に送られ黄昏前、奥殿に安着した。

カールは途中に石熊に追つ付かれ、茲に兩人は手に手を取つて、白砂の布きつめた道を、息もせき〳〵城内指して進み入るのであつた。

（大正一一、八、一五、舊六、二三、松村眞澄錄）

瑞月

君をおきて人をし戀ふといのちみななげも出さば快よからし

第四篇　修理固成（一五四）

第一四章　靈　と　パン（八五六）

テルの港に安着した高島丸を乘すて、言依別神、國依別は北へ〳〵と進み行く。此處には御倉山と云ふ高山があり、國人の信仰に依りて、龍世姫命を奉祭したる可なり立派な社が建つてゐる。之を御倉の社と云ふ。テルヒルヒの國境に秀立せる大山脈の最もすぐれて高き峰である。祠は御倉山の麓にあつた。そうして清き廣き谷川が飛沫を飛ばして唸りを立てゝ居る。言依別命は國依別と共に、先づ第一に此處に參詣した。

此谷川に限つて、御倉魚と稱する、長さ五六尺のいろ〳〵雜多の斑紋ある美しき魚が澤山に棲んで居る。されど國人はこれ全く御倉の社の御使と信じて、之を捕獲せん

どする者は一人もなかつた。もしも此魚を取り食ふ者ある時は、忽ち口歪み、唖となり、顔面全部に青赤白黄紫蒲黄などの班紋が現はれるので、誰も之を捕獲する者なきのみならず、此魚を見れば神の如くに尊敬し、手を合せて我願望を祈願するを常としてゐた。

此頃ヒルヒテルヒの國境に於ける殆んど五十里四方の地域は連日雨降らず、草木は殆んど枯葉の如く、果物は實入らず、五穀も亦一粒も取れなかつた。夫れが爲路傍に餓死充ち、其惨狀目も當てられない計りであつた。數多の國人は御倉山の山麓に集まり、此御倉魚に向つて、饑饉を免れんことを祈願する者引きも切らず、此谷間は殆んど人を以て埋もれてゐた。

言依別命は國依別と共に此有樣を眺め憐愍の情に堪へかね、如何にもして彼等が飢を救ひ、大切なる生命を保たしめんと、首を傾けて思案に暮て居る。谷底深く見渡せば、白衣を着たるウラル教の宣傳使四五人現はれて、切りに天國の福音を說き諭して居る。人々は宣傳使の前に蝟集し、空腹を抱いて、いろ〳〵と質問を試みてゐた。

甲、細き聲にて

甲「宣傳使樣、どうして此樣な饑饉が參つたので御座いませう？　我々等は最早生命は旦夕に迫り、死を待つより途なき者、兩親は四五日前に餓死し妻は乳兒を抱いたまま、之れ亦餓死し、後に私一人取殘されましたが、最早三日の壽命もむづかしくなつて來ました。此世を救ひ給ふ神樣、眞におはしますならば、なぜ斯樣な罪のない子供までが、饑餓の苦みを受けて居るのに、どうもして下さらないのでせうか？

私等は今日に至つて、神樣の存在を疑はねばならなくなりました。私の村は最早

七八分まで、ウラル教を信じて居乍ら、餓死して了ひました。斯うやつて此處に參つて居る人々は、御存じの通り痩せ衰へ、何程達者な者でも、こゝ十日の間には一人も殘らず餓死をせなくてはならぬ運命におかれてる者計りです。どうか此苦みをお助け下さる譯には參らぬものでせうか？」

宣傳使「迷へる者よ！　汝等ウラル教の神の福音を聞け！　人の斯世に生れ來るや、幽窮無限の天地に比ぶれば、旦の露の短き命のみ。現世は假の浮世なるぞ、苦みの家なるぞ、火宅なるぞ。何を苦んで現世にあこがれ、苦みを求めんとするか。時は近づきたり、審判の時は……汝等、わが前に悔ゐ改め、盤古大神の前に今迄の重き罪を謝せよ。然らば汝が生命は假令飢ゑ死にする共、其靈魂は永遠の花咲きみのる天國に救はれ、無限の榮樂を受け、常世の春を樂む事を得ん。悔ゐ改むるは今なるぞ。あゝ愚なる者よ、汝等は神の國の尊きことを知らず、物質上の慾に囚はれて、焦熱地獄の消えぬ火に燒かれて、身を苦まんとするか。天國は近づけり、悔ゐ改めて、救世の福音をきけ！　神は汝と共にあり、汝は清き神の僕として、日夜に神をほめ稱へよ！」

と諄々として說いてゐる。

乙「宣傳使樣、あなたの御話は誠に結構で御座ますが、我々五人は今や瀕死の境に陷り現に地獄の苦みを受けてをります。現在目の前に戀しき父は飢に倒れ、妻亦倒れ、兄弟姉妹幼兒に至る迄、饑饉の爲に斃れ亡び行く此有樣。天國に救ひ給ふは有難しとは思へ共、パンを與へ給はずば、我等は生くるを得ず、如何なれば此慘狀を神は救ひ給はざるか！」

宣傳使「我れは天國の福音を汝等に傳ふる聖職なり。汚れ、濁り切つたる此現世に執着せず、神の御招しの手に曳かれて、現世を後に天國に至るこそ、最上至極の樂みならん。汝等神の國の眞相を悟らば、現世を厭ひて、直に死を見ること、眠るが如く且つ甘露を嘗むるが如き法悦の喜びに充されん。信仰淺き者よ！　汝等神に來りて神を稱へよ、神は汝と共にましますぞ、神の御手にひかれて天國淨土に至るはこれ人生の最大目的の遂行であるぞよ」

乙「何卒一塊の食物を與へて下さることは出來ますまいか？　あなたは神の福音を傳へ給ふ宣傳使ならば、現在の我等を救ひ、我等をして生き乍ら天國の福音を悟り、神業に參加せしめ給はずや。今我々は如何に有難き福音なればとて、飢に迫りし苦しき身の上、現世に於て救はれず斯の如き悲慘の境遇にある者、いかでか天國の春を樂むことを得ん、……宣傳使樣！　斯の如く此谷間には御食魚が澤山に居りますが之を頂いて食物となし、飢を凌ぐことは許されぬでうか？」

宣傳使「生ある者を殺す勿れ、汝も亦殺されん！」

丙「あーあ、サッパリモウ駄目だ、何程有難い事を聞かして貰うても、我々を救ふ者は食物より外にはないと思ふ。此通り澤山の魚が泳ぎ居るを見乍ら、捉へて食ふことを許されず、もし食はば忽ち神罰にふれ、眼は眩み、口は曲り、顏には班紋を生じ忽ち我身が我姿に恐るゝ如き形相になつて了ふ……あゝ、如何したらよからうかな

ア」

と數多の飢人は吐息をもらし、瀰漫たる谷川の魚を眺めつつあつた。

言依別命は國依別と共に、宣傳歌を歌ひ乍ら國魂の神を祭りたる御倉の社に參拜

し、聲も凉しく天津祝詞を奏上し天の數歌を唄ひ了り、ウラル教の宣傳使が數多の信徒に向ひ、天國の福音を宣べ傳へ居たる前に宣傳歌を歌ひ乍ら進み行く。

言依別『神が表に現はれて　善と惡とを立わける
此世を造りし神直日　心も廣き大直日
只何事も人の世は　直日に見直せ聞直せ
過ちあれば宜り直す　仁慈無限の三五の
教を守らす百の神　此國人の慘狀を
完美に委曲に見そなはし　飢に惱める民草の
生命を助け給へかし　其生魂は天國の
惠を如何に受くる共　今日のあたり身体の
惱みを救ひ與へずば　心は捻け魂くもり
神の御國に昇るべき　珍の身魂も忽ちに
根底の國に陷らむ　此谷川を見わたせば
所狹き迄泳ぎ居る　げに美はしき御倉魚
彼等に與へ給へかし　神は靈界のみならず
此世に住める人々を　一人も殘さず御惠の
露にうるはせ永久の　命を守らせ給ふなり
三五教の神司　言依別や國依別の
教司は今ここに　國魂神に詣で來て
これの谷間に寄り來る　飢になやめる人々を

視るに忍びず天地の　神の御前に請ひまつる
神の使の魚ならば　世人の命を保つ爲
神よ！　我等に吸へかし　我れはこれより諸人に
谷間の魚を生捕らせ　命を助け與へなん
あゝ　惟神々々　御靈幸はひましませよ」

と歌ひ乍ら進み來る。此宣傳歌を聞いて、ウラル敎の宣傳使は眼を釣りあげ、言依別の前にツカ〳〵と進み寄り、

宣傳使『私はウラル敎の宣傳使ブールと申す者、只今あなたの宣傳歌を承はらば、實に怪しからぬことを仰せらるゝ樣で御座る。神は一切の生物を殺す勿れと諭させ給ふ。然るに神の使はせ給ふ谷間の魚を生捕り、數多の人々に食はしめ、命を助けやらんとの御言葉……　天則違反も實に甚しと申さねばなりますまい。　それだから三五敎の敎はいつ迄も世を暗黑に導くもので御座る。　速に神に向つて宣り直しをなさるが良からう。吾々は其言葉を聞いては聞捨なりませぬ。サア返答を承はりませう』

言依別『成程、神は至仁至愛にましませば、其御心より生物の命を取ることを嫌はせ給ふは當然の理で御座る。さり乍ら人の生命が大切か、魚の命が大切で御座るか？　能く御考へになれば分るでせう』

ブール『人間は罪の塊なれば、生き乍ら、地獄の苦みを受くるは當然で御座る。夫れ故に無限絶對力のおはします世界の造り主盤古神王の御德を讃美し、苦しみ、惱み災多き現し世を捨てゝ、一時も早く天國に上るを以て、人生の本領と致すでは御

座らぬか？　罪もなき神の御使の御倉魚を取り食ひ、汚れたる人間の腹に葬らんか神罰立所に至り、永遠に地獄の苦しみを受くるは、神敎のきめさせ給ふ所で御座るあなたは天が下の人民を眞に愛し給ふにあらず、神の心に背かせ、永遠に地獄の苦しみを受けさせんとし給ふ無慈悲の御仕打、我々は天下萬民の爲、飽く迄もあなたと主義の爲に戰はねばなりませぬ。論より證據、此谷川の魚を取食ふ者たま〳〵ある時は、神の怒りにふれて、天罰立所に至るは國人の既に〳〵知悉する所、あなたは此國の風習をも知らず、又神の掟をも辨へず、左樣な亂暴な事を仰せらるゝは甚以て惡虐無道の御精神と申さねばなりますまい」

言依別「今日は人民將に餓死せんとする危急存亡の場合なれば、如何に神の御使なればとて、仁慈無限の神の之を許させ給はざる道理がありませうか？　モシ左樣な神ありとせば、取りも直さず八岐大蛇の醜神か、或は金毛九尾の惡狐か、又は曲鬼の所爲で厶らう。我々はあなたの御言葉こそ、神の御子たる人間を魔道に導き苦む惡虐無道の行方と思はねばならなくなりました。決して〳〵此魚を取り食へばとて、神罰の當るべき理由は毛頭ありませぬ。私は斷言致しますよ」

ブール「三五敎の敎は實に無道極まる無慈悲の敎では御座らぬか。然らばあなた試みに斯の如く澤山な魚の中、假令小魚の一匹でも我目の前にて捉へ食つて御覽なさい。忽ち神罰至ることは火を睹るよりも明らかな事實で御座る。何程理窟は立派に立つても、事實其物には勝つことは出來ますまい……サアこれでもお食りになる勇氣がありますか？」

國依別「ウラル敎のブールさんとやら、何とあなたは、譯のわからぬことを云ひますな

ア。ウラル敎はそんな狹義な敎で御座いますか？　それでは誠の神樣とは申されますまい。論より證據、私が今、目の前にて、神の使と稱する御倉魚を捉へ、茲にて作り身と致し、食つて御目にかけませう。其代り萬々一、私の身の上に對し、此場に於て神罰至ることあらば三五敎全部を擧げてウラル敎の軍門に兜を脫ぎませう。之れに反して、私が此魚を取り食ひ何の反應もなしとせば、あなたは如何して下さる考へですか？　先づこれから第一にお約束をして置かねばなりますまい。御返答は如何で御座いますか？」

ブール「それは面白う御座らう。サア美事、神の使の御倉魚、私の目の前で捕獲して取り食つて御覽なさい。何の反應もなければ、我々はウラル敎全部を引率して、貴敎の軍門に兜を脫ぎませう」

國依別「確かですか？　キット間違はありますまいなア」

ブール「苟くも宣傳使の言葉に二言があつて堪まらうか。サア早く御決行なされよ」

國依別「ヤア有難い！　同じ事なら一つ、一番大きさうな奴から取つて、舌鼓を打たうかなア。ズイ分甘さうな魚だ。何を食つてゐるのか知らぬが能くマア肥太つてゐるワイ。……モシ〳〵敎主樣、面白い事になつて來ました。あなた能くブール宣傳使の言葉を腹へ入れておいて下さいませや。あゝ面白い〳〵！」

と云ひ乍ら國依別は、谷川に下り立ち、水と魚と殆ど等分になつて居る數多の魚の群に飛んで入り、三尺計りの潑剌たる班紋の美はしき御倉魚を一尾抱へて、ブールの前に現はれ來り、

國依別「どうも此奴は最も尤物と見ます。同じ神のお使でも、一寸師團長格と云ふ代

物ですから同じ殺して食つて神罰が當るのなら、大きな甘さうな奴を平げる方が利益ですからなア。何程靈主体從だと云つても、肉體のある限り、胃の腑の虫が食物を請求する。ジッとして怺へ切れるものでない。……サア、プールさん始めそこに居並ぶ數多の人々、今三五教の宣傳使國依別が、神さまの禁じ給ふたと云ふ此魚を叩き殺して作りとなし、皆さんの目前に於て ムシャ〳〵〳〵とやつて見せう。私が食つて神罰が當らなければ、皆さんにもキッと神罰の當るものでない。人はパンのみにて活くる者に非ずとか言つて威張つて居るどこやらの宣傳使の樣に、私はそんな氣樂なことは出來ませんよ。人は靈のみにて活くる者に非ずと、反對に云ひたくなつて來るのです。……パンなくて何のおのれが人間かな……だ」

と云ひ乍ら、短刀を取出し、潑溂たる此大魚を、喉のあたりをグサと刺し、一思ひに殺し、手早く肉片を取つては頬張り〳〵

國依別「アハ、、、、何とも云へぬ甘い味が致すワイ。これ丈魚が無盡藏に居る以上は五十万や百万の人間を養ふのは易いことだ。あゝ早く口が歪まんかいなア、物が言へんようにならんかいなア、眼がつぶれさうなものだ、顏一面に班紋がなぜ出來てくれぬのだ。出來ぬ筈だよ、神樣が人間に與へて生命をつながさうと思召し、此國に限つて此魚をお造り遊ばしたのだ。斯う云ふ饑饉が來た時の用意に、神樣が食つてはならないと云つて、平素はワザとお差止めになり、畜へておいて下さつたのだ……モシ、プールさん、どうで御座います。氣の毒乍ら、ウラル教は三五教の軍門に降服をなさらにやなりますまい……ヤア〳〵皆の方々、決して〳〵驚くには及びませぬ。此通り私がお手本を示しました。神樣の與へて下さつた、此餌さを頂き

もせずに飢ゑて死ぬとは何の事でせう。サア早くお食りなさい」

此聲に數多の人々はヤツと安心したもの、如く、矢庭に川に飛び込み、手頃の魚を抱き上げ、其場で嬉しそうに舌鼓をうつて食つてゐる。ウラル敎のブール始め四五の宣傳使は何時の間にか、コソ〳〵と此場より姿を隱して了つた。

これより、此國人はウラル敎に愛想を盡かし、國魂の神の社を日夜に崇敬し、且つ三五敎の固き信者となつて了つた。

言依別　命は國依別に向ひ、

言依別『私は是からテルの國を越ゑ、直ちにウヅの都に直行致しますから、あなたは此處に暫く止つて、國人に敎を宣べ傳へ、それよりヒルの都に渡りハルの國を一巡りしてウヅへ廻つて下さい。其上でゆつくり、改めて御相談を致しませう』

國依別『委細承知仕りました。左樣ならば、是非に及びませぬ。ここでお別れ致します。どうぞ御健勝にて御神務に御奉仕遊ばします樣祈ります』

言依別『ハイ有難う』

と宣傳歌を谷の谺（ゑーコ）に響かせつゝ、ウヅの國を目當てに進み行く。

國依別は御倉の社に暫く足を止め、詣り來る國人に敎を傳へ洗禮を施した。是より三五敎の敎は旭日昇天の勢ひとなつた。

（大正一一、八、一五、舊六、二三、松村眞澄錄）

第一五章　花に嵐（八五七）

言依別命、國依別の宣傳使の理解に依りて、此地方一帶の住民は殆ど全滅せんとしたるを、御倉魚を食することを許されてより、忽ち元氣恢復し、且つ言依別命を始め國依別の宣傳使を神の如く尊敬し、直に救世濟民の教は三五教に若くものなしと數十万人の人々はウラル教を脱退して悉く三五教に入信して了つた。併し乍ら言依別命は早くも此地を去りたれば、跡に國依別只一人、御倉の社を中心として教勢忽ちに振ひ、猫も杓子も、三五教にあらざれば救はれ難し、又正しき人間には非ざるべしとまで崇拜することとなつた。

國依別は三五教の教理を諄々として說きさとし、且つ天津祝詞や神言を教へ、御倉の社に國治立命、豐國姫命其他の諸神靈を合祀し、崇敬の的と定めた。國依別は又一種の宣傳歌を作り、國人に平素高唱すべく教へ導いた。

國依別「高天原に現れませる
　國治立大神は
　天の御柱つき固め
　瑞の御靈と現れませる
　力を合せ玉ひつゝ
　天足彦や胞塢姫の
　入岐大蛇や醜狐
　世は常暗となり果てぬ
　國の御祖の大御神
　普く世人を救はんと
　國の御柱つきこらし
　豐國姫大神と
　神世を開かせ玉ひけり
　醜の靈に現れませる
　曲鬼共がはびこりて
　皇大神は是非もなく

千座の置戸を負ひ玉ひ
根底の國に落ち玉ひ
深く其身を忍ばせつ
ウラルの彦やウラル姫
姫の命の枝神は
醜の煙に包まんと
世を曇らせし忌々しさよ
神伊弉諾大神は
大空高く渡したる
泥に沈みし海原を

天教山の火坑より
豐國姫と諸共に
此世を守り玉ひけり。
大國彦や大國の
天地四方の國々を
曲の教を開きつゝ
天津御空に現れませる
妹伊弉冊の大神と
天浮橋に立ち玉ひ
コオロ〳〵に搔き鳴らし

神生み國生み人を生み
日の出神や木の花姫の
授け玉ひて葦原の
あゝ惟神々〳〵
教の道のいや廣く
神の命と身を變へて
三五の月の御教を
これぞ誠の三五の
あゝ諸人よ〳〵
一日も早く目を覺ませ

天教山にましませる
貴の命に神業を
瑞穗の國を開きけり
神の御稜威のいや高く
埴安彦や埴安姫の
黄金山下に出現し
完美に委曲に說き玉ふ
錦の機の御教ぞ
尊き神の御光りに
朝日は照る共曇る共

月は盈つとも虧くるとも　假令大地は沈むとも
三五教の御教を　夢にも忘るゝこと勿れ
神を忘れし其時は　身に苦しみの來る時
心の惱みの來る時ぞ　如何なる事のありとても
神を忘れな三五の　道の藏に離れなよ
神は汝と共にあり　神の御水火を受つぎし
人は神の子神の宮　神に次での第一に
尊き者ぞ人の身は　決して賤しき者ならず
曇り汚れし人の身と　教へて諭す御教が
ありと知るなら速早く　互に心を注ぎ合ひ
邪道に陷ること勿れ　國魂神を齋りたる
御倉の山の龍世姫　大地の主と現れませる
金勝要大神の　珍の御靈の分靈
高砂島に永久に　鎭まりゐまして國人の
幸を守らせ玉ふなり　如何なる教の來る共
國魂神を餘所にして　心を曇らす事勿れ
龍世の姫を祀りたる　御倉の山の社こそ
國治立大神に　次で尊き神なるぞ
あゝ惟神々々　神の心に立返り
すべての物を慈み　互に爭ふこと勿れ

神を尊び國の君　敬ひまつり世の人に
神の惠を限もなく　輝き渡すは神の子と
生れ出でたる人草の　朝な夕なに守るべき
誠一つの務めなり　三五教の神司
國依別が此地をば　去るに臨んで國人に
記念の歌を作りおく　ア、國人よ〳〵
暇ある毎に讀み慣ひ　歌に踊りに音樂に
合して心を慰めつ　此世を守り玉ひます
皇大神の御心を　和めまつれよ此歌に
歌は天地の神靈を　感動さする神秘ぞや

世間話や無駄話　云ふ暇あらば一時も
夢にも忘れず此歌を　神の御前は云ふも更
山の上行くも又河へ　浸る時しも村肝の
心長閑に歌へかし　あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ　此世を造りし神直日
心も廣き大直日　只何事も人の世は
直日に見直せ聞直せ　過ちあれば宣り直す
三五教を吳々も　忘れざらまし何時迄も
世人の爲に殘しおく」

斯く歌を作りて、最も熱心なる信者の中にて氣の利いたるバークスと云ふ男に、足

彦と云ふ名を與へ、宣傳使の列に加へ御倉の社を守りつゝ、國人に三五の教理を說き諭すべく命じおき、國依別は又もやこゝを立出でて ヒルの國の都を指して進み行く。

チルの里の荒しの森に差かゝる時しもあれや、黃昏の暗に紛れて現はれ出でたる四五人の男、國依別の前に大手を擴げ、

甲「其方は三五教の宣傳使、よくも我々に恥を見せよつたなア。かく申さば別に名乘らずとも、此方の名は分つて居る筈、サアどうぢや。如何に其方、辯舌巧なりとて、實行力には叶ふまい。尋常に手をまはすか、但はチルの溪谷に、吾々監視の下に身を投げて自滅いたすか、それも不服とあらば、我々一同氣の毒乍ら、劍の錆となし呉れん。いかに汝勇猛なればとて、數百人の味方を以て、十重二十重に取卷あらばいつかないつかな、身を逃るゝの餘地なかるべし。吾れは云はずと知れたウラル教の宣傳使、ブール、ユーズ、アナンの面々だ。御倉の谷間に於て神の禁じた神魚を食ひ、剩つさへ國人に殘らず食はしめたる憎くき天則違反の張本人！ウラル教が數百年の努力を一朝にして水泡に歸せしめたる惡人輩、サア覺悟を致せ！」

と呼ばはる聲に、自然に集まる數十人の人影、「ワーイ〳〵」とどよめき來る騷々しさ。國依別大口あけて高笑ひ、

國依「アッハ、、、卑怯未練な汝等が振舞、御倉山の谷あひに於て、猫に追はれし鼠の如くチウの聲さへ得あげず、コソ〳〵と逃げ歸りたる卑怯者、かゝる爲体にて、いかで神の御子たる人草を敎化せん事、思ひもよらんや。汝等卑怯にも衆を恃んで只一人の宣傳使を苦めんとする腰抜共、美事、相手になるならなつて見よ。我言靈

の神力に依つて一人も殘さず、誠の道に言向け和し、汝が奉ずるウラル教を根底より改革しくれん。あゝ面白し〳〵」

と又もやカラ〳〵と打笑ふ。ブール、ユーズ、アナンの大將連は寄り來れる數十人の味方に何事か合圖をなすや、一齊にバラ〳〵と國依別に向つて武者ぶり付かんとする其可笑しさ。國依別は「ウン」と一聲息をこめ、右手の示指を以て、彼等一同に速射砲的に左から右へ振りまはせば、球の玉の神力を身に納めたる國依別の靈光は一しほ光强く、何れも眼眩み這う〳〵の體にて逃げ去るもあり、其場に打倒れて苦悶するものり、恰も嵐に花の散る如く、ムラ〳〵パッと逃げ散る可笑しさ。國依別は此淺ましき敵の姿を見て、又もや大聲に

國依「アッハヽヽ、面白い〳〵」

（大正一一、八、一五、舊六、二三、松村眞澄錄）

瑞月

なつかしき人もあらなくなつかしき　國もあらなく住める心地す

いと低う灰色なせる空のもと　住めるにも似し佗しきこゝろ

第一六章　荒しの森（八五八）

頭に淡雲を頂き　　腰に霞の帶を引まはし
ヒルヒテルとの國堺　　大山脈の其中に
屹然として立ち　　青葉の衣纏ひたる
御倉山の麓の溪流は　　淙々として天然の琴を彈じ
涼風常に新鮮の空氣を送る　　天國淨土の此仙境も
百日百夜雨降らず風吹かず　　木々の梢は萎れて
恰も枯葉の如し　　あゝ如何なる天の戒めか
國魂神の御怒りに出でたるか　　實に恐ろしき殘酷の中に
陷りし如き國人の悲哀の聲　　晨に父に死に別れ
夕べに母を見ぬ境に送る　　幼兒はかわける慈母の乳にすがり
悲しげに泣き叫ぶ　　あゝ天地の間に
神はまさずや、おはさずや　　御倉山の谷川水淸く
魚は潑剌として激流を泳ぎ　　人間の此苦める慘狀を
夢にも知らぬ人の身の　　あゝ神の子と生れし人間の
饑餓の幕に包まれて　　饑餓道の巷に迷ひ
苦める此憐れさ　　人は飢に苦み
魚は洋々として淸流に遊ぶ　　果して何の天意ぞや
あゝ此矛盾、あゝ此悲慘よ　　天地の神も見そなはせ

國魂神も國人を　守りまさずや朝夕に
空打仰ぎ地に俯し　祈りし甲斐もあらざりしや
今は手を束ね眼は閉ぢて　黄泉の國よりうとび來る
死の手に任すより　詛術もなき此悲慘さよ。
國人は老若男女の隔てもなく　國魂の社を指して
家路を後に龍世姫　谷川の邊に跪き
聲も弱りて虫の音の　秋野にすだく如くなる
目も當られぬ悲慘の幕　切つて下ろした時しもあれや
時を窺ひ隙狙ひ　待ちに待ちたるウラル教の
神の司のブール　アンナ、ユーズの三人

外に二三の伴人と共に　忽ち此場に現はれて
輕生重死の教理を説きぬ　されど〳〵人々は
今目のあたり飢に泣き　玉の緒の命も切れなんとする
今や此時　如何に尊き神の教なればとて
バンを離れて神の慈愛の心　いかで肯定し得む
否定の暗は谷川の　空氣を濁して物凄し
あゝ天道は人を殺さず　人生一期の九分九厘
早玉の緒の切れなむとする　其時もあれ
仁慈に充てる神の司　言依別の大教主
國依別を伴ひて　鳩の如くに降りまし

あゝ死か生か、大神の心　老若男女の胸の内
谷川の水音ならで　胸のとゞろき
喜びの飛沫、悲しみの波　漲りおつる瀧津瀬の
否定の涙ぞ憐なる。　ウラルの教の神司
熱辯を揮ひ　口角飛沫をとばし
切りに天國の福音を宣示す　神は靈なり人はパンのみにて
活くる者にあらず。　あゝ靈なる哉〳〵
生命の水にかわける者よ　かわく事なく靈くる事なき
靈の眞清水に活きよ　天國は汝のものなり
大三災や小三災　こも〳〵來る暗の世に
暇を告げて神の御國に　今や救はれんとする
審判の御手は下されたり　あゝ汝等神の慈愛に活き
混濁せる下界に　心を置くなと教ゆ
あゝ何たる悲慘ぞ殘酷ぞ　人はパンのみにて生る者にあらず
あらざると共に又人の身は　靈のみにて活くる者にあらず
靈と肉とは陰陽の如く　夫婦の如し
ウラル教は靈を偏重し　天に墮落し、神に苦む
現幽一致、靈肉同根の　教理を說き
先づ肉の惱みを救ひ　靈を救ふ
三五教は是れ救世の眞理　瑞の御靈と現れませる

言依別の神司
同情の涙に
其肉は榮ゑ、靈は笑ひ
荒みし土の上も
肉に飽き
神は必ずしも遠きにまさず
天國の樂みは眼前にあり
心の内に法悦の花は開き
あゝ何たる神の慈愛ぞ
言依別の慈愛の涙

國依別の慈愛の言葉
かわきたる人は甦り
枯野の如く地獄の如く
此谷川の水にうるほひ
忽ち地獄は天國と化する
高きにあらず
身の内にあり
歡喜の水は永久に湧く
御惠ぞ
暗澹たる天地の暗をてらし

國依別の世を思ふ
天津日の光りに染む
目のあたり天國を眺め
三五教が善か
靈に活きんとして体に死し
かゝる悲慘を天地の
靈に生き肉に活き
經と緯との綾錦
操る糸のいと長く
惠は神の御子と生れ

赤き心は森羅萬象を
あゝ惟神々々
浄土を樂しむ
ウラルの教が善か
体に生きんとして靈に死す
神はいかでか看過せん
靈肉一致、顯幽一本の眞諦を說く
織り成し玉ふ栲幡姫の
いや永久に神の榮光と
神の生宮と現れます

人々の上に下れかし
神の御前に鰐伏して
世人の爲に祈り奉る。
神の敎を說きさとし
永久に變らず動かず
神の御國の眞相を說き
人々の眼前に顯示し
國人の中より
パークスなる男に
名も足彥と改めさせ

あゝ　惟神　々々
まだ來ん先の世の中の
國依別は御倉山の溪間に
飢に苦む國人の命を救ひ
惱みもなく滅びもなき
娑婆卽寂光淨土の眞諦を
神の威德と慈光に浴せしめ
いとも秀れたる
詳しく敎を說き示し
御倉の宮司として

數多の人々に暇を告げ
山傳ひに　惟神　に身を任せ
荒しの森に差かゝる
御倉の山の谷川にて
神退ひに退はれたる
宣傳使ブールを先頭に
數多の信徒を使嗾し
十重二十重に取卷き
猛り狂ふ其可笑しさ
光に加へて球の玉

宣傳歌を歌ひ乍ら
やう〳〵チルの村
折しもウラル敎の神司
言依別や國依別に
意恨を晴らさんと
アナン、ユーズの神司
天國の破壞者として
玉の緒の命を奪はんと
國依別は鍛ひ切つたる魂の
其靈光に身を浸し

今や神德の現はれ時と　衆に向つて右手の指頭より
さも强烈なる　五色の靈光を發射したれば
ブール、アンナ　ユーズを始めとし
生命カラ〳〵逃げて行く。
國依別はウラル敎の寄せ手の、蜘蛛の子を散らすが如く、四方に散亂した間に、暫く息を休め、荒しの森の木蔭に腰打かけて、しばし瞑想に耽りつゝあつた。國依別は

獨語

國依「ア、宣傳使も實に愉快な者だワイ。三五敎の御敎に、宣傳使は一人の者と定められてある。言依別樣が御倉の谷間に於て、すげなくも袂を別ち玉ひし時、何となく淋しみを感じ、且つ命の冷酷を恨んだ。併し乍ら、大敎主の言葉を深く謹み、只一言の反問さへせなかつた。併し乍ら今になつて見れば、實に一人旅位愉快なものはない。否々決して我は一人旅にあらず、神は汝と共にありとの神示は、炳乎として日星の如く輝き玉ふ。正義に敵する仇もなく、誠を傷つくる刃もなし。あゝ面白き哉宣傳の旅！　あゝ勇ましき哉宣傳使の職掌！　廣大無邊の大宇宙を住處とし、天地の間を跋涉する心の愉快さ！　ねぢけ曲れるウラル敎の神司、信徒を、いざ是れよりは救ひ助けて、娑婆卽寂光淨土の眞諦を說きさとし、現代を面白く、樂しく勇ましく、過させ、又靈魂に喜びと安きを與へ、以て神の御國を地上に建設せん。アゝ惟神、御靈幸はひまし〳〵て、天が下の靑人草を、夏の木草の靑々と榮ゆるが如く、笑み榮ゑしめ玉へ！　國依別、天に跨まり、地に跼して、大神の御前に祈願し奉る」

と兩手を合せ、法悦の喜びを味はふ。

此時慌だしく此場に向つて走り來る二つの影があつた。國依別は此影を星明りにすかし眺め

國依『ヤアそれなる人よ。我れは三五教の宣傳使國依別なり、慌だしく何れに向つて行き玉ふか？』

と突然に森の木蔭より聲をかけられ、二人は忽ち大地に蹲がみ乍ら

『ハイ私はあなたに救はれました、キジと申す者で御座います、……私はマチと申す者で御座います……兩親は餓死し、妻子亦饑餓に迫られて歸幽、今は吾々兩人共、兩親妻子を失ひし不運の身の上、最早此世に活きて何の樂みもなしと、死を決し、御倉の山の谷川に横はり死を待つ内、有難くも、あなた樣御二人、何處よりか現はれ玉ひ、吾々國人の生命を助け玉ひし有難さ。かゝる尊き神恩に浴し乍ら、其御恩も報ぜず、のめ〳〵と酔生夢死するに忍びず。吾々が救はれし如く亦世の人を救ひまつり、神恩を報ぜんと、お後を慕ひ遙々參つた者で御座います。どうぞあなた樣の從僕となし、お伴やさして頂きたう存じまして、こゝまで參りました。幾重にも宜しく御許しの程を御願い致します』

國依別は心の中に

『ハテ困つたなア、折角一人旅の愉快が覺り、天空海濶何の氣遣ひもなく、自由自在に神の國を跋渉せんと喜び勇んだのも束の間だ。……折角こゝまで遠き山坂を越え、慕うて來た二人の男、無下に斷る譯にも行こまい。アヽ仕方がない。これも神樣の大御心だらう……』

と口の内に呟やき乍ら、思ひ切つた樣に、國依別は二人に向ひ

國依「三五教の宣傳使は一人旅するのが、神の掟である。されど今回に限り許しませう」

キジ「早速の御許し、有難う存じます」

マチ「何卒不束な者で御座いますが、宜しく御願ひ致します」

と嬉し涙に暮れる。之より國依別は、キジ、マチの若者を引連れ、ヒルの都を指して進み行く。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

第一七章　出陣（八五九）

秘露の國日暮シ山の山腹に廣大なる岩窟を掘り、ウラル教の靈場を作り、ロッキー山の本山と相應じて、一旦亡びかけたるウラル教も再び頭を擡げ、巴留の國の西北部よりヒル全体に其勢力を擴大して居る。此岩窟を日暮シ山の聖場と稱へてゐた。此處にはプールを教主とし、ユーズ、アナンの兩宣傳使はプールを助け、數多の宣傳使を四方に派し、大いにウラル教宣傳に力を盡しつゝあつた。

奥の一間には教主のプールを始め、アナン、ユーズの二人、色麗しき香り高き林檎を堆く盛り、互に皮を剝き、舌鼓を打つて味はひ乍ら、幹部會議を開いて居た。

プール「此ヒルの國には紅葉彦命の伜楓別命三五教を宣傳致し、其勢中々侮る可

らず、加之バラモン教の石熊の一派、此頃又もや俄に頭を擡げ、我々ウラル教の牙城に向つて突進し來り、數多の國人は去就に迷ひ、今は殆ど兩教の爲に數百年のウラル教の努力も、根底より覆へされんとしてゐる。我々は何とかして、彼等兩教の徒を驅逐せなくては、ロッキー山の本山に對し、申譯が御座らぬ。我々が日頃唱導して居た、世の終りは近づけり、悔ゐ改めよ、天國の門はやがて開かれんと、豫言せし神示空しからず、今年の此大旱魃、大饑饉、山河草木、殆ど枯死せんとする此慘狀、如何なる頑迷不靈の徒と雖も、之を見て無情を感じ、現世を忌み天國を希求せざる者あらん、此機逸す可らずとなし、國魂神を齋りたる御倉山の谷川に、數多の國人集まると聞き、遠路の所遙々宣傳の爲に、吾々出張し、大部分吾教理に服し天國に救はれんとする折しも、三五教の宣傳使忽然として其場に現はれ、体主霊從的教理を說き、再びウラル教をして根柢より轉覆せしめたる其腕前、かゝる邪教を看過するは我々ウラル教宣傳使として、教祖常世彦命に對し奉り、又ウラル彦の教主に對し、陳辯の餠なし。加ふるに又もや荒しの森にて、昨日の如き大敗を取りしは、返す〳〵も殘念至極の至りではないか？……アナン殿、此類勢を如何にして挽回せんと思はるゝか、腹藏なく述べられたい」

と覗く樣にして問ひかけた。アナンは暫く双手を組み、差俯向いて思案にくれてゐたが、ハタと兩手を打ち、ニタリと笑ひ、

アナン「教主殿、私に一切を御委任下さらば、三五教は申すに及ばず、バラモン教徒をして一人も殘らず歸順させて見ませう。併し乍ら此機を逸しては、到底其目的を達することは出來ませぬ。やがてここ十日も過ぐれば、今日の天候より觀察するに、

大雨沛然として降り來り、山河草木忽ちにして元の如く青々として蘇生するは鏡にかけて見るようで御座いますれば、今の内に宣傳使を殘らず四方に派遣し、國人の弱點につけ入り……汝等悔ゐ改めざれば今や亡びんとす、今迄の心を悔ゐ改め、ウラル教に身を任せよ、さすればやがて天に祈り慈雨をふり注ぎ、山河草木人類をして蘇生の喜びに醉はしめ、天國の樂みを再び地上に現はし與へむ、早く悔ゐ改めよ天國はウラル教を信ずる者の領分なり……と此際獅子奮迅の活動を開始せば、數多の國人は今迄迷へるバラモン、三五の兩教を弊履の如く拋棄して吾教に先を爭ひ、潮の如く集まり來るは目に見る如き感じが致します。どうぞ我々に此れを一任なし下さいますれば、數多の宣傳使を使役し、宣傳使長となつて、一肌脱いで見る覺悟で御座います」

ブール「成程、それも妙案だ。然らばアナン殿、宣傳の件に就いては、一切萬事御任せ申す」

アナン「早速の御承知……否御信任、有難く御受け仕ります」

ヒ喜色滿面に溢れ、肩を怒らし、腕を振り、意氣揚々として、期する所あるもの、如く雄健びしてゐる。ユーズは少しく首を傾け乍ら

ユーズ「教主殿、アナン殿の御進言は至極妙案奇策と存じますが、敵の末は根を切つて葉を絶やすヒか申しまして、如何しても根本的に兩教を絶滅するは、幹部に向つて大打撃を與へなくては、到底駄目でせう。假令一時ウラル教に歸順する共、又もや彼れ三五教の言依別、國依別の如き勇者ある上は到底完全に教義を宣布することは不可能でせう。先づ第一に焦眉の急とする所は、言依別、國依別の兩宣傳使を亡き

者とし、ヒルの都の楓別命の本城に攻め寄せ、根柢より轉覆絶滅せしめなくては到底駄目でせう。私の考へとしては、どうしても、枝葉の問題を後にし、此大問題たる根幹を変除せなくてはならないと存じます」

ブール「ユーズ殿の云はるゝ通り、吾れも其戰法を以て最も肝要なる手段と心得る。……アナン殿如何で御座らうか」

アナン「然らば斯う致したら如何で御座りませう。此館に集まれる八十人の宣傳使を半割き、四十人を一先づヒル、カル兩國に至急派遣し、殘り四十人の宣傳使を我々が引率し、教主殿は此聖場におはしまし、少數の役員信徒と共に、お守りを願ひ、我々はユーズ殿と先づ楓別命の館に向つて、夜襲を試み、只一戰に滅亡せしめ、神の力を天下に現はしなば、素より体主靈從の事大主義に囚はれたる人々は、一も二もなくウラル教の權威に畏服し、歸順致すは明かな活たる事實で御座いませう」

ブール「然らば兩人にお任せ申す。何卒一切萬事に違算なき樣賴み入る」

アナン「仰せ迄もなく、目から鼻へつき抜けた、智謀絶倫のユーズ殿、私が後に控へさせられての作戰計畫なれば、水一滴の遺漏も御座いませぬ。御安心下さいませ」

ブール「いや〳〵斯く迄勢力を四方に張つたる、楓別命又言依別、國依別のあの腕前到底一通りにては往生致すまい。何とか神策を考究致さねば、輕々しく進んで敵の術中に陷るやうな事あらば、それこそ挽回の道がつかぬ。此點に於てブール、甚だ心許なく存ずる。一例を擧ぐれば、御倉山の溪谷に於て、數多の宣傳使が居乍ら、脆くも我々は敗走致せし苦き經驗に徵し、容易に侮る可かざる强敵なれば、我々は最も深く神を念じ、神力を身に充實して進まねばなりませぬぞ。智謀絶倫と聞ゐたる

ユーズ、アナンの兩將迄が只一言の言靈をも交へず、雲を霞と逃げ歸つたる無態さ吾れは只一人ふみ止まるに忍びず、止むを得ず引返せし樣な仕末なれば、果して兩人に於て、確固不拔の成算が御座るかなア」

ユーズ「アハ、、、、吾々の神算鬼謀は敵に向つて弱しと見せかけ、ワザとに敗走の體を裝ひ、彼等兩人を版圖内に深く入り込ませ四方より取圍み、袋の鼠と致して本教に歸順せしむるか、但は滅亡せしめんかとの考へより退却を致したので御座る。假令三五教の宣傳使、慓悍決死にして、鬼神を拉ぐ勇あり共、たかの知れた一人や二人、何の恐るゝ所が御座いませう。これもユーズが一つの計略で御座れば、必ず〳〵御煩慮なく、ユーズ、アナンの實力を御信任あらんことを希望いたします」

と諄々として愉快氣に述べ立てた。

ブール「荒しの森の味方の敗北、たかが一人の宣傳使に對し、實に何とも形容の出來ない無念さではなかつたか。今思ひ出しても、實に腹立たしい。汝等兩人、吾前にのみ强く、敵の影を見れば忽ち軟化し、所謂蔭辨慶の徒にはあらざるやと、聊か懸念せざるを得なくなつた」

アナン「アハ、、、、是に就ても天機洩らす可らざる深遠なる我々の戰略、必ず〳〵御心配なさいますな。キツと大勝利を現はし、お目にかけるで御座いませう」

ブール「然らば、汝兩人を信任し、一切を委托する。隨分氣を付けて吳れ」

と一聞に入つて了つた。後に二人は顏見合はして、思案顏、

アナン「オイ、ユーズ、實に困つたことになつたものだないか。極別命は實に古今無双の神力を具備する大神將なり、言依別、國依別は之れ亦不可思議なる力を持つて

ゐる。彼等兩人が放射する五色の靈線は、到底我々近寄る可らざる威力がある。又バラモン教の石熊も中々以て注意周到な奴、決して油斷は出來ない。如何したら、千騎一騎の此場合、彼等を殲滅することが出來ようかと心配でならないワ」

ユーズ「それだから、俺達はユーズを利かして、教主樣の前でいろ〳〵と言葉を構へ、威張つて見せ、教主の心に力を與へたのだ。勇將の下に弱卒なしだ。弱將をして能く勇將たらしむるは、兩人の任務である。サア、アナン殿、これより宣傳使を全部引つれ、又數百人の信者を以て、先づ第一に楓別の宣傳使の館を夜陰に乘じ、襲擊することにせう。大刀竹槍の用意は出來て居るであらうか？」

アナン「大刀竹槍を使ふは變事に際してのみ用ゐることを、神明許させ玉へ共、未だ武器を以て立向ふべき時ではあるまいぞ」

ユーズ「さてユーズの利かぬ其お言葉、千騎一騎の此場合は卽ち大變事のことでは御座らぬか？　斯樣な時に武器を用ゐざれば、何れの時に用ゐんや。假令敵は少數と雖も、古今無双の勇者、到底、口先の辯舌を以て歸順せしむることは思ひも寄らざる事なれば、短兵急に暴力を以て彼等の牙城を屠むらなくては、ウラル教の休戚に關する大問題だ。危急存亡の分るゝ所、ウラル教國家の興亡此時にあり。……サア、アナン殿、早く決心あれ」

アナン「智謀絶倫と聞こたるユーズ殿の言葉、アナン贊成致しませう」

ユーズ「早速の御承諾、實に有難し」

と座を立ち、別室に入り、宣傳使の溜り所に在る宣傳使を吾居間に呼集め、ヒルの館の夜襲に時を移さず着手せん事を嚴命した。一同は一も二もなく、ユーズの言葉に服

従し、武装を整へ、ヒルの都の楓別命が館をさゝて、數百人の部下と共に、旗皷堂々と進み行く。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

瑞　月

一列に青みわたれる春の野に　いま眞盛りと咲ける菜の花

第一八章　日暮シの河（八六〇）

三五數の宣傳使
社を後に立出でゝ
漸くチルの村外れ
息を休むる折柄に
樹へて數を開きたる
プール敎主を始めとし
左右の力と賴みつゝ
荒しの森に出で來り

國依別は御倉山
山河渉り野路を越ゑ
荒しの森に辿りつき
日暮シ山に岩窟を
ウラルの彦の其一派
ユーズ、アナンの兩人を
數多の部下を引連れて
國依別を取圍み

只一討ちにせんものと
國依別は泰然と
生言靈を宣り終へて
龍の腮との寶玉を
己が身魂に納めつゝ
成り濟ましたる今日の旅
右手の拳を握りつめ
押寄せ來る敵軍に
威力に打たれて一同は
國依別は只一人

群がり來る可笑しさよ
心豐に口の内
琉球島に打渡り
受取り球の神力を
天下無双の神人と
數多の敵に打向ひ
示指を差し伸べて
向つて靈光發射せば
雪崩をうつて逃げて行く
脆くも逃げ行く敵の影

目送しつゝ高笑ひ
時しもあれやスタ〳〵と
マチ、キジ二人の信徒は
兩手をついて語る樣
ウラルの神を奉じたる
饑饉の厄に苦みて
迫り來れる苦しさに
社の下の谷川に
姿を眺め手を合せ
ウラルの道の宣傳使

神の威德を感謝する
現はれ來る人の影
國依別の前に寄り
私はチルの國人で
マチとキジとの兩人ぞ
玉の命は今日明日と
國魂神を祀りたる
神の使の御倉魚
無事安全を祈る折
數多引つれ出で來り

輕生重死の教を説く
肉の命のある限り
上なく尊くあればとて
やはか諾なひまつるべき
否定の暗に惱む折
三五の月の御教を
宣らせ玉ひて神代より
捕へて食ひ玉の緒の
天國淨土と相見做し
現世に永く働けと

さは去り乍ら吾々は
パンをば外に神の道
現當利益あらざれば
如何はせんと、とつおいつ
實にも尊き宣傳使
御空も清く明かに
神の禁ぜし御倉魚
命をつなぎ此世をば
尊き命を永らへて
思ひもかけぬ天來の

救ひの道の福音に
歡喜の雨は忽ちに
流れ注ぎし尊さよ
かゝる尊き神人を
此儘見逃しまつらんや
慕ひて君の教言
清き教を四方の國
惠の露を與へんと
故郷を後にしと〳〵と
國依別の神司

我等一同甦り
涙となりて谷川に
あゝ惟神々々
我等はいかでおめ〳〵と
命の限り御後を
さし許されて天國の
草の片葉に至る迄
我等二人は牒し合ひ
御後を慕ひ來りけり
何卒我等が願をば

清く許させ玉へかし
酬ゐまつらん我々が
五六七の世まで變らじと
誡受けさせ玉へよと
國依別は稍暫し
あゝ是非もなし〳〵
一人の旅と大神の
汝が切なる其願ひ
然らば我に從ひて
皇大神の御尾前に

大御恵みの萬分一
固き心は千代八千代
心定めし益良夫の
涙と共に頼み入る
思案にくれて居たりしが
神の教の取次は
定め玉ひし道なれど
無下に斷る由もなし
三五教の御爲に
仕へまつれよマチ、キジよ

天津大神國津神
汝が願ひを許すべし
御靈幸はひましませと
マチ、キジ二人は雀躍し
假令野の末山の奥
神に仕へし神司
一つも背かず村肝の
あゝ惟神〳〵々々
今日は嬉しき旅の空
御弟子となりて仕へ行く

國魂神に相誓ひ
あゝ惟神〳〵々々
生言靈を宣りつれば
神に任せし此體
千尋の海の底迄も
國依別の宣言は
心に銘じて守らなむ
神の御蔭に預りて
國依別の生宮が
天地開けし始めより

誠の神に巡り合ひ　　惠の露にうるほひて
夜露に宿る月影を　　伏し拜みつゝ進む身の
我等は如何なる果報ぞと　　喜び狂ふぞ勇ましき。

キジ、マチの新入信者は國依別に從ひ、ヒルの都を指して、涼しき夜の道を喜び勇んで進み行く。日暮シ山の溪谷より流れ來る大河の邊に辿り着いた。廣き河中に清流ゆるやかに流れて居る。されど永日の旱魃に河水は細り、今は川の一方のみ帶の如く水が、お定目的に流れて居た。國依別は立止まり

國依『ヤア、之が有名な日暮シの河だなア。隨分に廣い河だが、此頃の大旱魃にて河水も餘程減じたと見える。これ許りは人間として如何ともすることが出來ないなア』

キジ『宣傳使樣、此川上には日暮シ山の靈場と云つて、ウラル教の一派が大なる岩窟を掘り、其處に盤古神王の靈を祀り、非常な勢力で御座いましたが、テルの國の高照山の麓にバラモン教の石熊と云ふ宣傳使が現はれ、非常な勢力にて、ウラル教の勢力範圍に喰ひ入り、數多の信徒を作りました爲、此頃では餘程衰頽した樣子で御座います。此間御倉山の谷川に現はれ、あなたの言靈に辟易して逃歸りたる教主のプールと云ふのが、此水上なる靈場に割據して居ります』

國依『あゝそうであつたか。隨分難所だらうな』

キジ『非常な難所で御座いますが、いつも此日暮シ川は清い水が深くゆるやかに流れて居りますので、其山麓まで帆かけ舟が參ります。そうして交通を圓滑にやつてゐましたが、斯う川に水がなくなつては、大變に不便で御座います。私も一二回、ウラル教の信者として參拜した事が御座いますが、それは〳〵實に立派な岩窟で、目

も屈かぬ樣な廣いもので御座います」

國依「一度探險に往つて見たいものだなア」

マチ「そりや餘程面白いでせう。あなたを桃太郎さんとし、キジ公が雉子の役をつとめ私はマチと云ふ名のついた犬になつて御案内を致しませう。併し猿の役をつとめる者がないので、一つ困りましたなア」

國依「アハ、、、、そりやよい思ひ付きだ。併し隨分遠いだらうな」

マチ「里程は人の噂に依れば、八里だとか、十里だとか、中には十三里あるとか、マチ〳〵の噂ですから、其中を取つて先づ九里位にして置いたら如何でせうなア」

キジ「そんな道寄りをやつてゐますと、ヒルの都へ行くのが遲くなります。何れヒルを濟まして、ゆる〳〵お越しになつたら如何でせう、猿の役を勤める者が又ヒルの都で出來ませうから……」

國依「あゝそれも良からう。どつさりと金銀珠玉、珊瑚樹、瑪瑙、いやこなどあらゆる寶玉を滿載して桃太郎さんの凱旋も面白からう」

と笑ひ話に耽つてゐる。

斯かる所へ川上の方から、月の光に瞬き乍ら、幾十旒とも知れぬ白旗に、三葉葵の紋を赤く染め抜いて、夜風に靡かせつゝ、幾百とも知れぬ人影、蜈蚣の陣を張り乍ら川に沿ひ、足許騷がしく、忙しげに此方に向つて進み來る一隊があつた。これぞアナン、ユーズの引率せるウラル教の宣傳使、信徒の一團がヒルの都に向つて攻め行く途中である。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄録）

第一九章　蜘蛛の兒（八六一）

幾十旒とも分らぬ白旗を夜の風に飜し、旗鼓堂々と、川の堤の兩方より進み來る數百の集團を眺めて、國依別は打笑ひ、

國依別「アハヽヽヽ、マチさん、キジさん、面白くなつて來たぢやないか。昨夜荒しの森で數百人のウラル敎の連中、我々一人を十重二十重に取卷乍ら、脆くも國依別の言霊に吹散らされて、雲を霞と逃去つたウラル敎の手合が、今度はどうやら武裝を整へ捲土重來の擧に出よつたらしい。なんと愉快な事が出て來たものだ。お前達兩人は、入信記念の爲に一つ南北に分れて、兩方の敵に當り、縱横無盡にかけ惱まして見たら如何だ。其代りに國依別が無限の神力を與へるから、萬々一お前達の不利を見たならば、球の玉の神力を以て、敵を射倒して了ふ成算が十分にあるから、試驗的にやつて見やうではないか？」

キジ「願ふてもなき其お言葉、私もテルの國に於ては相當に、神力はなけれ共、腕力並ぶ者なしと言はれて居る豪傑ですから、こんな面白い機會はありますまい。如何なる武器を以て攻め來る共、此腕一つあれば大丈夫です。何卒私を其任に當らして下さい」

マチ「私もキジの樣な力は有りませぬが、氣轉を利かす段に於ては、決して人後におちない積りです。そんなら兩人が此川の南北に分れ、一つ奮戰激鬪をやつて見ませう。あゝ面白い！！、天運循環し來つて、優曇華の花咲き匂ふ春に會うたる心地がする」

と力瘤だらけの腕をまくり、ブン〳〵と振りまはし、撚をかけてゐる。

國依「そんなら兩人、一つやつて見よ……國依別は司令長官になつて、此丸木橋の上から戰況を調べる事にせう。あゝ良い月だ。こんな愉快な事は、滅多にあるものぢやない。併し乍ら成るべくは、兩人敵の生命をとらない樣にしてくれ」

キジ「宜しい、一人も殘らず此空川へ放りこみ、人間の山を築いてお目にかけませう」

斯く言ふ間、ウラル敎の大部隊は最早間近くなつて來た。マチは北側を、キジは南側の草の中に身を潛めて、敵の近付くのを今や遲しと、腕を唸らせ、片唾を呑んで控へてゐる。

南の一隊はアンナ之を率ゐ、北側の一隊はユーズ之に將として、勢ひ凄まじく川邊を下り來る物々しさ。マチは忽ち敵前に寒がり大音聲

マチ「ヤア〳〵、ウラル敎の宣傳使、それに從ふ小童共、よつく聞け！　我れこそは三五敎の宣傳使、言依別命、御倉山の谷間に於て、此方が言靈の神力に泡を吹き、脆くも逃げ去つたる弱武者共、サア我々は神勅に依つて、汝が蓋に數多の人々を引つれ、武器を携へ、攻め下り來る事を前知せしを以て、汝等一人も殘らず素首を引抜き、汝の最も希求する靈の國、天國へ引導を渡してくれん。覺悟を致せ！」

と呶鳴り立てた。ユーズは數から棒の、どことなく權威に充された此言靈に辟易し數多の部下を率ゐ、堂々とここまで進み來れる手前退却もならず、聚く胸を無理に押へ

ユーズ「ナ、何と申す。汝は体主靈從の邪敎を奉ずる言依別命なるか。如何に獅子王の勢あればとて、雲霞の如き大軍に向つて、如何に孤軍奮鬪すればとて、汝の力

の及ぶ所にあらず、要らざる事を致して、命をすてるよりも、神妙に我軍門に降れ」

マチ「ナニ猪口才千萬な、汝こそ某が前に閉口頓首して罪を謝し、貴重なる生命を無事に持つて歸れ。汝等は天國に至る事を無上の光榮とする者ならば、一人も殘さず靈の國へやつてやるのはいと安き事なれ共、そう致しては懲戒にならぬ。汝の最も忌み嫌ふ娑婆世界に置いて苦しめてやらん。覺悟を致せ。アハヽヽ」

ユーズ「何と其方は妙な事を申す奴、人間は生命が大切だ。肉体なくして神業が勤まると思ふか。馬鹿を申せ、汝こそ今某が、生命をとり、地獄の引導を渡してくれん覺悟致せ……ヤア〳〵者共、言依別に向つて斬つてかゝれよ」

と采配ふつて下知すれば、數多の部下はマチ一人を取まき、斬つてかかる。向うは大勢、此方は只一人、すばしこくも体を躱して草の茂みに隠れて了つた。大勢はあわてふためき、互に刃に火花を散らし、ケチン〳〵と同志打を始めてゐる其可笑しさ。

又一方南岸に向うたキジはアナンの引率せる一部隊に向ひ、叢より忽然と現はれ大音聲

キジ「ヤア其方はウラル教の宣傳使であらう。吾こそは三五教の神司國依別なるぞ。飛んで火に入る夏の虫、能くマア出て來よつたなア。サア是より此方の發射する言靈の彈丸を浴びて、汝の最も忌み嫌ふ現界を棄て天國に救ひ與へん。どうぢや嬉しいか」

と嘶鳴り立て、大聲に人もなげに笑ひ出した。アンナは國依別と聞いて、心戰き乍ら元氣を出し

アンナ「アハヽヽヽ、何と申す。國依別、敗けたと見せかけ御倉山の谷川に於て逸早く姿をかくし、又荒しの森に於てワザとに敗軍を裝ひ、汝をここにおびきよせんとの我等が計略、うつかりと出てうせた痴呆者。モウ斯うなる上は百年目、神妙に我軍門に降るか、ゴテ〳〵吐さば、汝が素首引抜いて天下の害を絶ち、汝が身魂を地獄に追ひおとしくれん……サア部下の者共、國依別に向つて斬りつけよ」

と下知すれば「オウ」と答へて數多の人數、竹槍をすごき、キジ一人を目當に突込み來る。キジは大手を擴げ、來る奴〳〵、ひつ摑んでは日暮シ川にドッと許り投げ込み瞬く間に數十人の人山を築いた。

此方のユーズの部下は何れも長劍を以て戰ひ、南方のアナンの部下は何れも竹槍を以てキジ一人に向つて戰つてゐる。されどキジの手に掛つて、最早數十人は河中に突込まれ、腰を打ち、足を摧き、痛さに身動きも得せず、慄ひ戰いてゐた。國依別は丸木橋の上より指をさし伸べ、サーチライトの如き靈光を發射して、此域を射照らしてゐる。アナンは最早叶はじと思ひきや、采配を打ふり〳〵

アナン「退却！　退却！」

と連呼し乍ら、散り〳〵バラ〳〵に算を亂して敗走する。

此方ユーズは味方の同志打に度を失ひ、止むを得ず采配を打振り、又もや南方のアナンに倣つて「退却！　々々！」と號令する。此聲にユーズの部下は思ひ〳〵に元來し道を先を爭ひ逃げて行く其可笑しさ。マチは之を眺めて高笑ひ

マチ「アハヽヽヽ、脆いものだなア。俺もこれ丈の神力が出るとは思はなかつたが、實に不思議だ。これも全く三五教の神様の御神德、次いでは神様のお使ひになる神魚

を食つた爲でもあらう。實に有難いものだなア。ドレ〳〵國依別樣に戰況を詳さに報告せねばなろまい。それに付いても何處ともなく、强烈なる光の現はれた時、敵の光に打たれて狼狽する樣は實に痛快であつた」

と獨言ちつゝ、國依別の傍に意氣揚々として歸つて來た。

南方に向うたキジも亦勝ち誇つたる面色にて、力瘤だらけの腕を打ふり乍ら歸り來り

キジ「宣傳使樣、實に有難う御座いました。生れて以來、斯樣な愉快な事は御座いませぬ。戰ひの最中、あなたより强烈なる靈光を送つて下さつた時の其氣强さ、面白さいやモウ終生忘る可らざる愉快な印象を與へられました。アハヽヽ」

國依「ヤア兩人共、天晴れ〳〵お手柄だつた。あれ丈の勇氣があれば、最早三五敎の布敎者としても大丈夫だ。國依別も幸福だ。何と良い弟子が出來た者だなア」

キジ「本當に仰有る通り、古今獨歩の神力充實せるあなたに對し、斯樣な英雄豪傑がお弟子になるのも全く神樣のお引合せでせう」

國依「アハヽヽヽ、隨分吹く事も吹きますねい。ヤア面白い〳〵、それ丈の氣慨がなくては駄目だ」

マチ「私だつて、ヤッパリあなたの御家來として餘り不適當な者ではありますまい。どうです宣傳使樣、あなたの御感想は……」

國依「アハヽヽヽ、何ちらも擦いだら棒が折れる樣だ。力に甲乙が無くて面白い。マア是からは慢心をせない樣に心得て、神界の爲にドシ〳〵盡して貰はうかなア」

兩人「ハイ承知致しました。今日の腕試しに依つて、最早神の御加護ある事を悟つた以

上は、天下何者をか恐れんやで御座る」

と腕を搖つて雄健ぴする其可笑しさ。國依別は……妙な奴が降つて來た者だ……と心秘かに微笑み乍ら二人を伴ひ、明けかゝる夜の道を、河を渡つて、北へ〳〵と足を早め宣傳歌を聲高く歌ひ乍ら、ヒルの都を指して進み行く。

空に輝きし月は漸く光り褪せ、星は次第に影を沒し、繪絹を擴げた樣な東の空は、紅を潮し始めた。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞逢錄）

第二〇章　雉と町（八六二）

マチは夜の道を歩み乍ら、意氣揚々として歌を唄ひ進み行く。其歌マチ

「神が表に現はれて　善と惡とを立分ける
三五教の御教　實地の誠を居乍らに
味はひ見たる嬉しさよ　ウラルの神の御教は
人の弱きに附け入りて　神の天國楯となし
或は脅し叱りつけ　我國人を無理やりに
彼れが教に引入れる　四方の國人驚いて
何れも心に合ね共　止むを得ざれば入信し

心を詐はる偽信仰
昨日は向うの岸に咲き
無理往生の此教
何時か木實の結ぶべき
咽喉もかわきて朝夕に
靈主体從を標榜し
至美と至樂の天國へ
捨てゝ神國へ昇り行け
困りぬいたる時もあれ
我等國人一同は

池に浮かべる浮草の
今日はこちらの岸に咲く
いかでか花の開くべき
我國民は飢に泣き
此世を歎つ折柄に
苦しき此世は假の世ぢや
災多き現世を
なごゝ教へる醜の道
恵みの雨は降り來り
蘇生の思ひをなしにけり

其神恩に酬ゐんと
神の柱と現れませる
心の誠を明かしつゝ
喜び勇み進む折
ユーズ、アナンが數百の
あゝ惟神々々
試すは今や此時と
ユーズの率ゆる一隊に
いと爽かに宣りつれば
月の光に閃かし

荒しの森に驅け來り
國依別の御前に
今日は嬉しき弟子の數
ウラルの教の神司
部下を引つれ降り來る
限りある身の我力
日暮シ河の北堤
向つて珍の言靈を
敵は怒つて劍大刀
前後左右に攻めかくる

心得たりと身をかわし
敵の樣子を伺へば
味方と味方の同志打
折しもあれや國依別の
天津日の如射てらせば
總体崩れて蜘蛛の子を
此有樣を打眺め
心も勇み腕は鳴り
歸り來りし面白さ
丸木の橋を打渡り

草葉の蔭に身を忍び
心の曇りし盲共
劍光閃く面白さ
貴の司が靈光を
流石のユーズも辟易し
散らすが如く逃げて行く
我れは思はず吹出し
悠々驅がず橋の邊に
國依別に從ひて
夜露に月の宿る道

涼しき風に送られて
颯の別の現れませる
あゝ 惟神々々
マチとキジとの兩人が
神の御爲國の爲
盡させ玉へ天津神
國魂神の龍世姫
赤き心を現はして
あゝ 惟神々々
キジは又もやマチの歌に勵まされて、足拍子に合せ歌ひ始めた。

夜なきヒルの神館
聖地へ進む嬉しさよ
御靈幸はひまし〳〵て
心を清め身を淨め
世人の爲に眞心を
國津神達八百萬
御倉の宮の御前に
遙かに感謝し奉る
御靈幸はひましませよ」

キジ「俺の在所はチルの國
村の難儀を見るにつけ
飢に苦む人々を
現はれ祈る折柄に
降りましたる神人の
瀕死の境に陥りし
飢を充たして甦り
我等の父か母神か
報ゐ奉らでおくべきか
御目にかゝり鴻恩の
御倉の山の峰つづき
神の悪みを蒙りて
救ひ玉へと谷川に
天の八重雲掻き分けて
生言靈に助けられ
數多の人々忽ちに
これぞ誠の救世主
此高恩の萬分一
御後を慕ひ逸早く
万分一に酬ゐんと

マチと語らひ山坂を
木々の花さへチルの村
實に有難き宣傳使
木蔭に憩ひ玉ひたる
感喜の涙にくれ乍ら
心勇みて日暮シの
思ひがけなきウラル敵
剣抜き持ち太刀槍を
三葉葵の白旗を
進み來るぞ面白き

一散走りに乗越ゑて
荒しの郷に來て見れば
天津祝詞を宣らせつゝ
其御姿を伏し拜み
御弟子の數に加へられ
河の畔に來て見れば
ユーズ、アナンの宣傳使
林の如く立て並べ
風に靡かせ堂々と
國依別の御許しに

われはアナンの一隊に
生言霊を宣りつれば
情容赦も荒風に
エヽ面倒と四五十の
日暮シ河に投げ込めば
ウラルの教の一隊は
折柄照らす霊光に
命カラ〳〵失せて行く
神の力を目あたり
日暮シ河を打渡り

喜び勇み立向ひ
頑迷不霊の曲神は
旗を靡かせつきかゝる
敵を忽ち鷲掴み
アナンの司を始めとし
総体亂れ崩れ出す
旭に露の消ゆし如
あゝ 惟神 々々
目撃したる尊さよ
神の司に従ひて

物騒至極の夜の道
露ふみしめて進み行く
心の空も照り渡り
吹かれてヒルの神館
身の上こそは樂しけれ
御霊幸はひましませよ
月は盈つとも虧くるとも
三五教の御爲に
神の教に従ひて
尊き教に救ひなむ

互に戦功誇りつゝ
東の空は茜して
いと爽かな朝風に
霊地を指して進み行く
あゝ 惟神 々々
朝日は照るとも曇るとも
キジの命のある限り
不惜 身命どこ迄も
普く世人を 惟神
天と地との大神は

我等を深く守ります
なりとの眞理聞きしより
其天職を悟りけり
盡さにやおかぬキジの胸
國依別の神樣よ
いや永久に我々を
厚く導き玉へかし
御靈幸はひましませよ！

我は神の子神の宮
此世に人と生れたる
神の御爲世の爲に
マチの心も其通り
完美に委曲に聞し召し
正しき神の御教に
あゝ惟神々々

歌ひ乍ら、ドシ〳〵と白みかけた空を、勢よくヒルの都を指して立向ふ。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、於村眞澄錄）

第五篇　山河動亂（一五五）

第二一章　神王の祠（八六三）

國依別一行は足に任せて、旭を浴び乍ら、東南に向ひ前方に突當つたアラシカ山の大峠をソロ〳〵と登り始めた。此地點は最早今年の旱魃にも遭ず、極めて安全にして山々の草木は色美はしく、旭に照り輝き、活々として居る。一行は心も勇み、何となく愉快ゆに此急坂を知らず〳〵の間に半日を費やして、峠の頂上に達した。

東北を眺むれば、ヒルの都は細く長く帶の如く人家が並んで居る。戸數に於て殆ど二三千計りの、此時代に取つては大都會である。又西南を瞰下すれば、ウラル敎のプールが立籠りたる日暮シ山は手に取る如く、青々と綠の衣を被り、八合目以上は雲に包まれてゐる。

キジは國依別に向ひ、」

キジ「モシ、宣傳使樣、あの未申の方向に當つて白雲の帽子を着てゐる高山が、例の日暮シ山で御座いますよ。隨分景勝の地點を選んだものですなア。三方山に圍まれ、一方に日暮シ河の淸流を控へ、四神相應の地點だと云つて、ウラル教の連中が非常に誇つて居る所で御座いますよ。ヒルの都はあの通り、茫々たる原野の中に築かれてありますから、大變に便利は宜しいが、要害の點に於ては日暮シ山に比ぶれば、非常に劣つて居る樣ですなア」

國依「成程ウラル敎も恰好な地點を見付け出したものだなア。併し此頃の樣に肝腎の日暮シ河があの通り淵切つて了つては、交通の點に於て最も不便であらう。何事も一利あれば一害ある世の中だから、我々なれば矢張ヒルの都の方が餘程氣に入るよ」

マチ「氣に入ると云つたら、此涼風、暑い坂を汗タラ〳〵と流して登り詰め、山上に息を休めて四方の景色を見晴らし、浩然の氣を養ふ我々は、實に天國へ登りつめた樣な心持になつて來ました。何と云つても人は高山に登り下界を見下すに限りますなア。コセ〳〵と狹い谷間に潛んで、日々何とかかんとか云つて騷いで居るよりも、時々は山登りも又愉快なものです」

國依「サア皆さん、參りませうか」

ヒスタ〳〵と坂路を降り行く。二人は「モウ少し休みたいなア……」と小聲に囁き乍ら、已むを得ず後に從ひ、急坂を下りて行く。

見れば坂路の傍に一つの祠が建つて居る。樟の大木は二三本天を封じ此祠に對し雨傘の役を勤めて居る。ふと見れば、面やつれのした妙齡の女、社前に跪き何事か

切りに祈願をこめてゐる。マチ、キジの兩人は早くも之を認め

二人「ヤア宮傳使樣、アレ御覽なさいませ。あすこには常世神王を祀つた祠が御座います。そうして何だか一人の女が荐りに祈願して居るやうですが、一つ立寄つて樣子を聞いて見ませう。此淋しい山路、若い女の身として、此祠へ參つて來るのは何か深い曰く因緣が無けねばなりますまい」

國依「ア、成程、古い社が立つてゐるなア。實に立派な楠が榮えて居る。これ位な大木にならうと思へば數千年の星霜を經て居るであらう。我々の樣に二百才や三百才で死んで了う弱い人間と違つて、數千年の壽命を保ち、尙青々として枝葉を繁茂させ、所在暴風雨に對し依然として少しも驕がず、此高山に生活を續けて居る楠は實に偉いもんだ。これを思へば植物位偉いものはない樣な氣がするネ。樟の木に靈あり、且言語を發するなれば、遠き神代の有樣を聞かして貰うんだけれど、併しそれも仕方がない」

マチ「モシ〳〵それはさうと、あの女を御覽なさい。隨分痩衰へて居るぢやありませぬか？　兎に角祠の前へ立寄つて調べて見たら如何でせう」

國依「兎も角神樣に參詣した序に尋ねて見るもよからうよ」

と云ひ乍らツカ〳〵と祠の前に進みよる。三人は祠の前に跪き拍手再拜、天津祝詞を清く涼しく奏上し終り、傍の長き石に腰打掛け息を休めた。

キジは祠前に跪き何事か切りに、落涙と共に祈つて居る女の側近く寄り、いたゞきに脊を撫でさすり乍ら

キジ「モシ〳〵、何處の御方か知りませぬが、大變な御信仰で御座いますな。此お社は

常世神王様の御神霊が御祀り申してあると云ふ事で御座いますれば、貴女がこゝへ御参りになつてることを思へば、大方ウラル教の御方でせうネ。かよわき女の只一人、此高山の祠に詣でゝ御祈りをなさるのは、何か深き御様子のある事と御察し申します。我々の力に及ぶ事なれば、何とかして御相談に乗つてあげたいと思ひますが、どうか御差支なくば、大略丈なりとお話し下さいませ。及ばず乍ら御力になりませう」

此同情のこもつたキジの言葉に、女は漸く顔をあげ

女「ハイ、私はアラシカ山の山麓に住居いたすエリナと申す者で御座います。私の父はウラル教の宣傳使でエスと申しますが、一ケ月以前に三五教の宣傳使様が御立寄りになり、いろ〳〵と尊きお話を父と共に、夜中遊ばした結果、父も非常に喜びまして、四五日の間其宣傳使を我家に止めおき、ウラル教の信者にも三五教の美點を説き聞かせ、神様の御神徳を受けて、大變に喜び勇んで居りました。所が此事忽ち日暮シ山の岩窟に聖場を立てゝウラル教をお開き遊ばす、云はゞヒルの國に於けるウラル教の總大將、ブールの教主の耳に入り、至急我父のエスに参れとの御使、父は喜び勇んで、其靈地へ参りましたが、其後は何の音沙汰もなく非常に母と共に心配を致して居りましたが、四五日前にウラル教の宣傳使が尋ねて來られ、エスさんは三五教の宣傳使を自宅に宿泊させ其上ウラル教の信者に對して三五教を説き勸めたと云つて、日暮シ山の岩窟内の暗き水牢に投げ込まれ、大變な苦しみを受けて居られる、お前さん達も妻子たる廉を以て、何時召捕りに來るかも知れないから氣を付けよと、秘密に知らして呉れた親切な方がありました。母はそれを聞くより忽ち癇氣

を起し、重き病の床に臥し、日に〳〵體は弱り果て、見る影もなく痩衰へ、一滴の水も食物も喉を越さず、此ま、死を待つより外に途なき悲運に陷つて居ります。それ故私はウラル教の教祖常世神王樣の祠に日々詣でまして、父の危難を救ひ、母の病氣を助け玉へと、祈つて居るので御座います」

キジ「それは〳〵、承はれば實にお氣の毒です。私も今迄ウラル教の信者で日暮シ山の靈場へは、二度計り參拜した事もある位で御座いますが、實にウラル教は、今となつて考へて見れば殘虐な教ですよ。人の死ぬ事を何とも思はず、天國へ救はれるのだから、無上の光榮だなんて、譯の分らぬ事を教へるのですからたまりませぬワ。併し乍らあなたの御父上が三五教の宣傳使を四五日も御泊めになつたと云ふのは、ウラル教に愛想をつかし、三五教の美しい所をお悟りになつた結果でせう。コリヤ、キツと因緣があるに違ひない。こんな所でこんな御話を聞くのも、神樣のお引合せに違ない。必ず〳〵御心配なさいますな。キツと我々が、御父上や御母アさんを助けて上げませう」

エリナ「どこの御方か知りませぬが、初て會うた此私に、御親切によく云つて下さいます。何分にも憐な私の今日の境遇、どうぞ御助け下さいませ」と手を合せて、涙乍らに賴む憐れさ。

國依別「モシ、エリナさんとやら、必ず御心配なさいますな。我々一同がキツとお父さんを、如何な水牢の中からでも、日ならずお助け申して、あなたの宅へ送り屆けませう」

エリナ「ハイ〳〵、有難う御座います。何分宜しう御願ひ致します。……あなたは、そうしてウラル教の宣傳使樣で御座いますか？」

國依「イエ〳〵、我々は三五教の宣傳使國依別と申す者、今此處に居る兩人は、チルの國の方で、キジ、マチと云ふ非常な豪傑ですよ。キッと助けて上げますから、機嫌を直して早く家路に歸り、お母アさんにも安心させて上げなさい」

エリナ「ハイ、有難う御座います」

と嬉し涙にくれ、地に伏して泣いて居る。

國依別「キジ、マチの兩人さん、御苦勞だが、モ一度ウラル教の靈場へ引返し、モウ一戰を始め、エスさんを救ひ出して來ようぢやないか？」

キジ「ハイ、それは大變に面白いでせう　併し乍ら、たかの知れたブールやユーズにアナンの如き木葉武者が大將株をしてゐる樣なウラル教へ、宣傳使にワザ〳〵往つて貰ふのは實に畏れ多いぢやありませぬか。あんな者は我々一人にて餘つて居ります　どうぞ私一人を日暮シ山に差向けて下さい。そうしてマチはエリナさんに從いて行き、お母アさんの病氣を鎭魂して直して上げる役となり、宣傳使樣は之よりヒルの都へお越しになり、我々が芽出たく凱旋して歸る迄、待つてゐて下さいませぬか？」

國依「隨分偉い元氣だが、必ず油斷は出來ないぞ。夜前大勝利を得たからと云つて、何時迄も勝つ計りにきまつたものぢやない。隨分氣を付けて、兩人共一時も早くエスさんを救ひ出す樣、御苦勞にならうかな。エリナさんは私がヒルの都へ行く途中だから、お宅迄送り屆け、お母アさんの大病を治しておいて、ヒルの都へ行くこと、

致しませう」

キジはニタリと笑ひ乍ら

キジ「宣傳使樣、中々抜目がありませんなア」

と心ありげに笑ふ。

マチ「きまつた事だ。神樣のお道に一分一厘、毛筋の横巾も抜目があつて堪るかい。お前こそ今度は抜目なく、氣を付けて行かないと、思はぬ失敗を演ずるぞよ」

國依別「マチさんも是非同道を願ひますよ。どうもキジさん一人では心許ないからなア」

キジ「宣傳使樣、餘りひどいですな。高が知れたウラル教の靈場、私一人にて喰ひ足らぬ樣な氣分が致して居ります。マチの樣な男、連れて行くのは何だか足手纏ひの樣な氣が致しますけれど、あなたの御命令とあらば伴れて行きます。……コレ、マチ、貴樣は餘程果報者だ。征夷大將軍キジ公の副將となつて行くのだから、さぞ光榮に思つてゐるだらうなア」

マチ「アハ、、、何を吐すんだ。餘り調子に乘つて失敗をせぬ樣にせよ。……そんなら宣傳使樣、キジ公の後に從ひ、これより日暮シ山に立向ひ、ウラル教の大將ブール其他の奴原を片つ端から言向け和し、エスの宣傳使を救ひ出し、日ならず凱旋の上、ヒルの都の楓別命が御舘に於て御面會申しませう。……サア、キジ公の大將、早く出立遊ばせよ」

とからかひ乍ら、早くも此場を後に、先に立つて元來し坂路を歸り行く。

キジ「オイ〳〵大將を後にして、先へ行くと云ふ事があるものか。待つた〳〵」

と呼はり乍ら

キジ『宣傳使樣、エリナ樣、左樣なら、後日お目にかゝりませう』

と言葉を殘し、マチの後を追つかけ行く。

これより國依別はエリナと共にアラシカ山の山麓エスの宅に至り、エリナの母テールの病を癒やさんと祈願し、數日逗留の後ヒルの都を指して進み行く。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

第二二章　大蜈蚣（八六四）

マチとキヂとの兩人は
三五教の宣傳使
國依別に從ひて
夜道を辿りやう〳〵に
夜も明け放れ露の道
勢込んでスタ〳〵と
下らぬ歌をうたひつゝ
アラシカ山の麓まで
來りてこゝに息休め
又もや乘出す膝栗毛
險しき坂を潔く
やう〳〵頂上に登りつめ
涼しき風を浴び乍ら
あゝ面白い〳〵
四方の國原見渡せば
山野は靑く河淸く

西南方に屹然と
聳り立ちたる日暮シの
指さし乍らウラル敎
靈地は彼處と國依別の
問はず語を始めつゝ
廣袤千里の平原に
楓の別の鎭まりて
神の館は目の下に
確にそれと分らねど
勝利の都は足許に
雲の冠を頂きて
山の麓の聖塲を
プールの敎主が立籠る
貴の司に指し示し
又もや東北指さして
長く築きしヒルの町
三五敎を開きます
甍も高く聳ゐつゝ
風に閃く旗印
近寄りたりと勇み立ち

心のまゝに涼風を
貴の司は先に立ち
二人は名殘を惜みつゝ
險しき坂を下りゆく
老木茂りウラル敎
神王祠を發見し
女が一人面やつれ
祠の前に俯いて
怪しき樣子にキジ公は
言葉優しく勞はりて
味ふ折柄國依別の
早く行かうと駈出せば
是非なく後に從ひて
路の片方に楠の木の
敎の祖を祀りたる
近寄り見れば妙齡の
髪もおどろに手を合せ
何かヒソ〳〵祈り居る
側に寄り添ひ背をなで
事の樣子を尋ぬれば

女は漸く顔をあげ
ウラルの教の官傳使と
妾が父は三五の
我家に泊めし罪に依り
引立てられて仄暗き
閉され玉ひ朝夕に
此世を果敢なみ玉ふらむ
妾の母は驚いて
水さへ飲めぬ重態に
命盡きんとする場合

アラシカ山の山麓に
仕へまつれるエスの子よ
神の司を呼止めて
日暮シ山の聖場に
殘酷無情の水牢に
苦しみ歎き玉ひつゝ
父の災聞くよりも
持病の癇氣再發し
痩衰へて玉の緒の
いかで妾は此儘に

のめ〳〵眺めて居れませう
數祖の神の御前に
母の病を一日も
心の誠を捧げつゝ
朝夕祈る我心
キジ公涙に暮れ乍ら
神に仕へしキジ公が
お前の父のエスさんを
マチ公お前は此方に
病に苦む母親を

ウラルの教を開きたる
父の危難を逃れしめ
早く治させ玉へよと
一心不亂に神の前
推量あれと答ふれば
心配なさるなエリナさん
とつとき力を現はして
キッと助けて上げませう
從ひエスの家に行き
鎭魂歸神の神業で

早く助けて上げて呉れ　　國依別の神樣は
一時も早く擽別　　神の司の鎭まれる
ヒルの館に出でまして　　キジが凱旋する間
ゆる〳〵御待ち下されと　　勇み切つたるキジ公の
言葉にマチは擦りよつて　　オイ〳〵キジ公そりや無理だ
何程弱い敵だとて　　お前一人ぢや危險だ
國依別の命令に　　從ひ俺もついて行く
國依別の神樣よ　　次いではエリナの娘さん
天晴れ凱旋した上で　　後日にお目に掛りませう
云ふより早くマチ公は　　尻ひつからげアラシカの
峠を上り下りつゝ　　一目散に駈出せば
オイ〳〵待つたマチ公と　　キジ公も尻をひつからげ
章駄天走に進み行く　　あゝ惟神々々
御靈幸はひましませよ

キジ、マチの兩人は漸くにして、日暮シ河の丸木橋の袂に辿り着いた。

キジ「オイ、マチ公さん、夜前のキジ公が奮戰激鬪の結果、大功名を現はしたる古戰場へやつて來た。此邊は死屍累々として横たはり、地下一尺を掘れば、白骨現はれ、夜は鬼哭啾々として寂寥身に逼ると云ふ記憶すべき印象の深き地點だ。一つ敵の亡靈を吊つてやらうぢやないか。アハヽヽヽ、南無アナン、ユーズ大居士、頓生菩提だ、どうだ一つ宣傳歌でも手向けてやらうぢやないか？」

マチ「何を云ふんだ。古戰場所か、極めて新戰場だ。我々が大勝利を得た聖地だから、神樣に御禮の爲神饌を献るべき神饌場だよ。あゝ新鮮の空氣は水の如く流れ來り我等が汗を拭ふ。勇なる哉。壯なる哉。ぎれ〳〵一服仕らう」

と云ふより早く、芝生の上に大の字を描いた。

キジ「ヤア、早から大勝利を祝つて、大の字になつてゐるのか。そう背部を下にしてゐると、キツと大敗の憂目に會はなくてはならないよ」

マチ「何、敵をして大敗せしむると云ふ緣起を祝つてゐるのだ。俯いて見れば敵を大に屈伏さすると云ふ大腹となるのだ、アハヽヽヽ」

と罪なき事を喋り散らし乍ら、餘り勢込んで走つて來た體の疲れに、何時の間にか兩人共熟睡して了つた。

何處よりともなくガサ〳〵と這うて來た大蜈蚣に、耳の一方を刺され、痛さに目を醒まし起上つたキジ公は、矢庭に蜈蚣に向つて唾を吐きかけた。蜈蚣に對し大禁物の唾に忽ち、大蜈蚣はピンと体を伸ばし、青くなつて其場に倒れて了つた。キジ公は耳の痛さに何氣なく、唾を指につけ、之を疵所に塗つた。不思議や痛みは忽ち止まり、耳の腫も瞬く間にひすぼつて了つた。マチ公は此騷ぎに目を醒まし、四邊を見れば、大蜈蚣が唾の毒にあてられて、殆ど虫の息になつてゐる。マチは之を眺めて、

マチ「オイ、キジ公、殺生のことをするない。貴樣は蜈蚣の敵藥たる唾をかけたのだな生物を殺すと云ふ事は天則違反だぞ。早く蜈蚣を助けてやらないか」

キジ「俺だつて別に無益の殺生を好んでする者ではない。安眠中を窺ひ、俺の耳を咬よつた惡い奴だから、此奴こそ唾棄すべき惡虫だと思つて吐きかけたのだ。俺の唾は

偉いものだらう。一口吐くが最後、こんな大蜈蚣が忽ち寂滅爲樂、頓生菩提となるんだからなア。アハ、、、、武士と云ふ者は變つたものだらう」

マチ「グズ〳〵してゐると、蜈蚣公さん、本當に綽切れて了ふぢやないか。早く川へ連れて行つて水を呑ましてやれ。そうすれば忽ち全快して、元の通りシャン〳〵と活動する樣になるワ」

キジ「此蜈蚣の歩く姿を見ると、夜前アナンの奴、澤山の竹槍隊を連れ、單縱陣を作つてやつて來た時の姿にソックリだ。これも何かの前兆だ。此儘に捨てゝおかうぢやないか。蜈蚣が蘇生した樣に、ブールの奴、餘り元氣付きよると、一寸此方は少數黨だから險呑んだ」

マチ「アハ、、、、ヤッパリどつかに不安を抱いてゐると見ゐるなア。國依別樣の前ではズイ分吹いたぢやないか。こんな所でこんな弱音を吹く位だつたら、肝腎要の戰場に向つては、如何することも出來なくなつて了ふよ」

キジ「何さ、働く時に働きさへすれば宜いのだ。今は斯う弱さうにして力を蓄へ、潛勢力を養つておくのだ。エ、邪魔臭い、蜈蚣の奴、助けてやらう」

と云ひ乍ら、川の中の流れを目がけて、手に摑んで投げ込んだ。蜈蚣は水に陷ると共に、毒は消ゑ、水中を辛うじて泳ぎ乍ら、岸に登り、二人が足許に勢能く、百本の足に馬力をかけ、大速力で突進し來る。二人は何となく、怖氣つき、トン〳〵と逃げ出した。不思議や蜈蚣は何處までもと云ふ調子で追つかけ來る、厭らしさ、とうく〳〵ウラル敎の靈地と聞ゑたる日暮シ山の岩窟の前迄追つかけ來り、忽然として姿を消して了つた。此蜈蚣は言依別命が球の玉の靈力を以て、二人の出陣を勵ますべく顯現

せしめたのであつた。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

瑞　月

君逝きて母のなげきや深からむ　一粒種と想ひし御子ゆへに

立ちのぼる香華の煙ゆら〳〵と　君の姿のごとく見ゆるも

第二三章　ブール酒（八六五）

日暮シ山の靈場、岩窟舘の教主ブールの奥の間には、アナン、ユーズの二人、悄然として控へ、ブールが岩窟内の神前に額づき、ヒルの都に向つて派遣したる部下一同の大勝利を得、一日も早く凱歌を奏して歸ります樣と祈願をこめ終りて、しづ〳〵と我居間に歸つて見れば、豈計らんや、昨夜堂々として出陣したる二人の勇將は、悄然として我居間に待つて居る。ぞこともなく元氣の無さうな影うすき二人の姿を見て不安の念に驅られ乍ら、

ブール「ヤアお前はアナンにユーズの兩人、ねらう顏色が冴えて居ないぢやないか。何か途中に失敗を演じ、女々しくも、おめ〳〵と歸つて來たのだらう」

此聲に二人は敎主の前に現はれたるを悟り、俄に空元氣をつけ

アナン「これは〳〵敎主樣で御座いましたか、エー實は、その中々以て、何で御座いましたよ。非常な何々で、實に不愉快……オットドッコイ壯快な事で御座いました。なア、ユーズ、お前もチッとユーズを利かして、戰況を、そこはそれ、うまく、遺漏なき樣に御報告を申すんだよ」

ユーズ「申し上げます、此處に伊弉冊大神は、御子迦具槌神を生み玉ひて、みまかりましき。伊弉諾大神いたく怒り玉ひて、御子迦具槌神の御首を切り玉へば、ユーズ（湯津）石村たばしりつきてなりませる神の名は、サツバリコンと岩折の神、根折の神」

ブール「コリヤ〳〵何を言つてゐるのだ。戰況は何うだと問うてゐるのだ。詳さに報告せないか」

ユーズ「ハイ報告も報告、赤心報國、あなたの爲に所在ベストを盡し、數多の部下を黑死病否酔使し乍ら、選擧運動を開始致しました所、殘念乍ら一騎當選はまだ愚か、次點者となりました。イヤもう戰ひは時の運とか申しまして、ウンと敵を屁古ませ、ヒルの都に攻め寄するに先立ち、脆くも敗走致しまして御座います」

ブール「どちらが敗走したのだ」

ユーズ「ハイそうですなア。すべて戰ひはどちらか一方が負なくては、平和克復は到底出來ませぬ。甚だ以て不名譽千萬な悲慘な目に會ひましたよ」

ブール「貴樣の云ふ事はチッとも分らない。……オイ、アナンの大將、ユーズはどうかして居る樣だ。其方詳しく一伍一什を報告せよ」

フナン「御尋ね迄もなく、我々勇士を引率し、轡を並べて堂々と、日暮シ河の兩岸を、長蛇の陣を張り乍ら、旗鼓堂々と攻め下る。時しもあれや、幾十百とも知れぬ十曜の神紋馬印、高張提灯、數限りもなく、堂々として丸木橋を越に、此方に向つて攻來るヒルの都の楓別命が部下の者共、總勢殆んど三千有餘人、日暮シ河の兩岸に人垣を作り乍ら攻上り來る其物々しさ。寡を以て衆に敵するは英雄豪傑にあらざれば能はざる所、我々兩人は僅か數百の手兵を以て之に當り、先づ第一に我部下の竹槍隊を兩分し、敵の不意を狙つて側面より、槍の穂先を揃へ、関を作つて突貫すれば、敵は敗亡うろたへ騒ぐを、尚もおつゝめ、一人も殘らず日暮シ河の急流につきおとしたり。不意を喰つた數多の敵は忽ち北岸に駈上り、遁走せんと先を爭ひ、川土手に上り行くを待構へたるユーズの抜刀隊は、好敵御參なれと采配打振り、僅か部下三百の味方に向つて下知すれば、味方の勇士は、劍の切先を揃へ、片つ端から切りたて薙立て、忽ち血河屍山の大勝利、日暮シ河は忽ち血潮の洪水氾濫し、數多の敵の屍は一人も殘さず血流に漂ひ、太平洋を指して流れ行く、其壯烈さ。語るも中々愚なりける次第で厶る」

ブール「隨分針小棒大的の報告ではないか？　僅三千人の敵の血潮に依つて、日暮シ河は血潮の濁流氾濫し、三千の屍が一つも殘らず流失したとは、合點の行かぬ汝の報告、人間の血液は肉體の幾百倍もなくては、左樣な事が出來ない筈だ。コリヤ何かの間違ひだらう」

アナン「ハイ、マチ……ガイではなくて、マチヒキジと……エー、何だか、ウン、一寸マチ〳〵になつて、餘りの嬉しさで、大勝利で、申上げる事も後や先、支離滅裂の

やうで御座いますが、實の所は餘りの大勝利、意外の好結果で、手の舞ひ、足の踏む所を知らず、嬉し逆上せに、逆上せの幕が下りた所です。今ヤツと戰況の報告に歸つたまでの所、何が何だか頭のまとまりがついてゐませぬ。暫く沈思默考の時間をお與へ下さいませ。其代り數百の部下、一人も負傷もなく、凱歌をあげて、只今廣殿に休息致し居りまする。何卒御褒美と凱旋祝の爲に、お酒をドッサリ呑ましてやつて下さいませ。人に將たる者は部下を愛さなくてはなりませぬ。我々は部下あつての大將で御座います。あなたも我々あつての敎主で御座いますから、少々の瑕瑾があつても、見直し聞直し、慈愛を以て望まるゝのが、仁慈無限の敎主の御天職で御座います。三五敎の何事も直日に見直し聞直し、身の過ちは宜り直すと云ふ事は、ウラル敎に取つても結構なことだと思ひます。我々に取つても甚だ御都合のよき敎理かと存じます」

ブール「何は兎もあれ、非常な激戰だつたと見える。三千有餘の敵を皆殺しにし乍ら、味方は一人の負傷者も出さなかつた其方の手柄、さぞ氣をつかつたであらう。逆上するのも無理もない。サア〳〵倉を開放し、葡萄酒を出し、一同に飽く迄呑ましてやつてくれ。我れは是れより大神の御前に凱旋の御禮を申上ぐる爲、參拜致して來るから、ゆる〳〵と酒でも飲んで、一同に休養を與へるが宜からう」

と云ひ棄て、又もや神殿にいそ〳〵として進み行く。

後見送つて二人は互に顏見合せ胸なでおろし、舌を出し乍ら小聲になり

アナン「ア、漸うにして虎口を逃れた。サア是から皆の奴に口止め料として、葡萄酒をドッサリ振れまつてやらう。是もヤッパリ俺の知謀の致す所だ。ブールの敎主も此

頃はチッと度呆けてゐると見ゐる。何分御倉山の谷間で肝をつぶし、荒しの森で二度ビックリを致し、ビックリ虫が増長して癇癪を患ひかけてゐる様な矢先だから、木に竹をついだやうな支離滅裂な我々の陳辯でも、勝つたと云ふ一聲が嬉しかつたと見ゐ、うま〳〵と騙されよつただないか。サア是から酒だ〳〵」

と云ひ乍ら、アナンは先に立ち、一同の集まる大部屋に進み行き、稍高き所に停立して、

アナン「部下一同に今日は凱旋の祝として、葡萄酒を飽く迄飲む事を、ブールの大將より許されたに依つて、一同喜んだがよからう。今ユーズの副將が酒倉へ鍵を以て行かれたから、皆の者共は倉の前に往つて、蒲萄酒を此處へ運び來り、腹一杯呑んだがよからう。又下戸連中はアルコールの混ぜらない蒲萄水があるから、それを飲んだがよからう。斯の如く取計らつたのも部下を愛するアナンの眞心より出でたるものなれば、萬々一敵主がこゝに現はれ、其方達に何をお尋ね遊ばしても、一言も申上げてはなりませぬぞ。一切萬事、アナン、ユーズの大將樣に御聞き下されと、其處は甘くごまかしをにごすのだ。要するに部下一同の舍身的大活動に依つて、ヒルの都の楓別が假設敵と丸木橋の畔に我部隊と衝突し、一人も殘さず切り殺し、突殺し、河に投込み、屍は太平洋に流れ行きしと、事實を詳さに報告しあれば、一同も其考へで居らなくてはなりませぬぞ。サア早く倉へ往つて、酒をお運びなさい。此蒲萄酒は所謂一同の者の口に錠を卸す妙藥だから、無茶苦茶に口のあかぬ樣にして下さい」

と筱口令を布いてゐる。暫くあつて、山の如く蒲萄酒の瓶は運ばれた。アナン、ユー

ズの二人は教主の此場に現はれ來るを喰ひとめん爲、神殿に詣で祈願の終ると共に、詞巧に教主室に這入らせ、いろ〳〵と出鱈目話に教主の機嫌をとつて居る。酒は追々と醉がまはつて、彼方にも、此方にも、あたり構はず、昨夜の失敗談が語り續けられた。甲舌をもつれさせ乍ら

甲「オイ、皆の奴、昨夜はどうだつた。隨分惨々な目に會うたぢやないか。たつた一人や二人の敵に向つて、大勢の者が取圍み、取つては投げられ〳〵、川の中で散々な目に會はされ、膝頭をすり剝いたり、腰の蝶番を歪めたり、隨分苦しかつたなア。併し今日は何ニ云ふ吉日だらう。戰に負て歸つたら首でも取られやせんかと心配して居つた。それに却腹な、芳醇な酒を飽く迄喰へなんて吐しやがつて、サッパリ見當が取れん樣になつたぢやないか。こんな事なら常時戰に從つて敗て來るんだなア」

乙「きまつた事だよ。負て勝とると云ふ事があるぢやないか、負たお蔭で、こんな甘い蒲萄酒が鮮腹呑けるのだ。漆に負たり、角力に負たつて、こんなボロいこたありやせぬぞ。何事も神樣のマケのまに〳〵活動するんだなア、アッハ、、、」

丙「オイ、甲乙兩人、そんな事を喋るもんだない。昨夜の敗戰をかくす積りで、アナンユーズの大將が、お前たちや俺たちに、アナンのかゝらないように、ユーズを利かして、甘く教主をゴマかし、蒲萄酒をブールつて來たのだから、チッとは大將の御心も察して靜にせぬかい」

乙「ブールつて來たか、ボロつて來たか知らぬが、モウちつと甘くゴンベリそうなものだなア」

丙『二人の大將が力一杯ベストを盡して、ビヤクレる丈ビヤクつて來たんだから、そんなに不足を云ふと罰が當るよ』

甲『喧しう云ふない。是からブールさんの所へ往つて、一つ思ひ切り、御祝ひに踊つて來うぢやないか。酒を飲んだら酔ふのは當り前だ、酔うたら踊るのは當然だ。泣酒もあれば笑ひ酒もあり、怒り酒もある。泣きたい奴は泣け、怒る奴は怒れ、笑ふ奴は精一杯笑つて樂むんだなア』

丁『笑ふと云つたら、俺も實は笑ひたうて、仕方がないんだ。十分笑はして呉れないか』

甲『笑へ〳〵、ドッと皆に分る樣に、あの高座へ直立して、ニコ〳〵雜誌の相場が狂ふ程笑つて見よ。笑ふ門には福來りだ、サア笑つたり〳〵』

丁は忽ち高座に上り、蒲萄酒の瓶を片手に提げ、ラッパ呑みをし乍ら

『アハ、、、、阿呆らしい。戰ひに負て、河底へ放りこまれ、向脛打つて、痛かつたが、チッとは可笑しうて、笑ひが止まらなんだ。

イヒ、、、、鼎に最後屁を放りかけられたよな、臭い〳〵言ひ譯をして、屁の音のよなブール敎主を甘く屁煙にまき、屁の音のやうなブードー酒をおごらして、敗軍の將卒が得意になつて、酒を食らふ其スタイルの可笑しさ。

ウフ、、、、打つて、變つたアナン、ユーズのあの態度、敎主の君に丸木橋の戰ひに腰を拔かし、肝を潰し、ウフ、、、、うろたへ騷いで逃げ歸つた二人のマイストロ（大將）がウマ〳〵とうまい酒をボン倉からひつぱり出し、俺達をヘーベレケに酔はしやがつて、口止めせうとしてゐる其可笑しさ。いつも自分計り酒を喰つて、良

い氣になつてる大將株が今度は餘程マゴつきいがつて、キッウ閉口しよつたと見れ態度が變つたちやないか。

エヘ、、、、エー怪体の惡い。こんな惡い〳〵蒲萄酒のうまい奴を、無茶苦茶に呑ましやがつて、俺達を酒に醉はして殺さうとは餘り虫がよすぎるワイ。鰌なら酒で殺せるか知らぬが人間さんはさうはいかぬからなア。

オホ、、、、尾も白い〳〵頭も白い、尾も白狸の腹皷、腹がはちけるとこ迄、呑んで腹を拍つて、尻からブール〳〵とお屁を彈じ、丹精こらして、踊ろぢやないか、ハ、、、、、腹が立つて、臍がよれて、悲しくなつて來るワイ。酒と云ふ奴ア、妙な奴だなア。オイ皆の奴、チッと笑はんかい。酒が沈んで了うぞ。

ヒ、、、、、日暮シ河でひさい目に會うた昨夜の事を思ひ出すと、腹が立つワイ、夜夜中にひつぱり出され、石礫の一杯つまつた川中へ蛙をぶつけたよに投げられた時の事を思へば、悲しうなつて來た。そうかと思へば、こんな甘い酒をドッサリ飲ましやがつて、何程怒らうと思つても、面白く可笑しく嬉しくなつて、これが笑はずに居れるかい。

フ、、、、、降つて湧いたる儲け物だ。フルナの辯を揮つて、深く企んだアナン、ヒユーズの今日の働き、何と云つても、俺たちは酒さへ呑めば、至極御機嫌だ。

へ、、、、、屁を水の中で放つたやうな、便りない、氣轉の利かぬ弱虫計りが、五百羅漢の樣な醜いレッテルを陳列しやがつて、酒を喰ふ時の、其ザマつたら、何の事だい。百鬼晝行と云はうか、千鬼夜行と言はうか、丸で餓鬼に水を與へたよな、情ないザマ、何奴も此奴も口賤しい奴計りが、能くもマアこれ丈揃うたもんだなア

こんな代物を飼つてゐる、屁こきのブールさんも閉口だらう。

ホ、、、、、本當に誠に、失敗してこんな甘い酒を頂くのなら、毎晩でも戰ひに出て、負てみたいなア。なんと云うても、一人や二人の敵に大勢が當るんだから勝つ氣づかひはないワ。もしも勝つて見よ、酒所の騒ぎじやない。アナン、ユーズの大將計りが酒を食つて俺達は水を呑んで辛抱さゝれるのが落ち位なもんだよ。

ワハ、、、、惡いことがあればキッとあとに善い事がある。それだから、酒に醉ひ、煙に醉ひ、信仰に醉つぱらつて居るのだ。醉うて〳〵醉ひちらし、力一杯ヨタリスゝを並べ立てゝ、今日の凱旋祝ひを完全に勤め上げるんだよ。此葡萄酒は本當に善い事だらけだ。醉うて〳〵甘うてようて、腹にたまつてようて、力がついてようて、氣分迄がよいと云ふのだから、醉ひがまはるのも當前だ、ウフ、、、、エヘ、、、、オホ、、、、終りだ。誰か怒り上戸の奴か、泣上戸の奴代つて呉れ。俺りやモウこれで幕切れだ」

と云ひ乍ら、行歩蹣跚として高座を覺束なげに降り切りに喋りちらして居る。此處へアナン一人やつて來て、

アナン「ヤアお前達、御苦勞だつた。隨分骨が折れただらうなア」

戍「スイ分甘い酒で、飲むのに骨が折れましたよ。流石アナンさんは人の水上に立つ丈あつて偉いわい。ブールの大將を甘いことだまし、敗軍を勝たよな顏して、葡萄の倉まで開かしたお手際は、我々の大將として實に適當だ。なア甲州、せめてこんなことが十日も續くと良いんだけどなア」

アナン「オイ〳〵靜かにせんかい。教主のお耳に這入つたら大變だぞ。大きな顏して酒

を飲む譯にも行くまい」

戍「モウ何時大將や教主がやつて來て呑むなと云つたつて、構ふもんか。呑む丈呑んで了つたのだから、此上呑んでくれたつて、こんな腐つたよな酒を誰が呑むもんか。始めの二三本は甘かつたが、後になる程、酒が惡うなつて、泥水を飲んでるようだなア、皆の奴、

醉ひみての後の心に比ぶれば　これ程味ない酒とは思はざりけり

だ、アハヽヽ」

此時「教主の御出場」と云ふ知らせに一同は俄に肌を入れる、坐り直す、襟をかき合はす、大騒ぎをやり出した。

悠然として現はれたるブールは一同に向ひ、

ブール「今岩窟（グろート）の門前に三五教の强者が二人、襲ひ來りし樣子、一同の者、注意を致されよ」

一同は「ハイ」と云つた限り、忽ち酒の醉も醒め、顏を眞青にして慄うてゐる。教主の命に依り、一同はバラ〳〵と入口の方に駈出した。

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

第二四章　陷穽（八六六）

アナン、ユーズの領袖連はへべレけに醉ひ、足も碌に立たず、舌もまはらぬ連中を數多引率し、石門のふちに現はれ、

アナン『其方は昨夜、丸木橋の畔に於て我々に抵抗至した三五敎の奴だろう。サア、良い所へ來やがつた。今貴樣と戰爭したおかげで凱旋祝の酒宴を催うし、俺達は醉が廻つて氣分が好い最中だ。何用があつて來たのか知らぬが、そんなむづかしい顏をしないで、酒でもくらつてゆつくりと談判をせうぢやないか？　固苦しいこと許り言つてると命が縮まるワ。たまには命の洗濯や睾玉の皺伸ばしをやらないと、人間の樣な氣持がせんワイ。そんな野暮な顏しないで、トットと中へ這入つて機嫌よく一杯やらんかい』

キジ『昨夜は脆くも泡を食つて逃げ失せ、到底正面の戰ひにては、われ〳〵を如何ともすることが出來ないと思ひ、毒酒を呑まして俺達をよわらせる猾き考へだらう。そんな策に乘る此方じやないぞ。コテ〳〵吐かさずに、其方等が押込めて居る宣傳使のエスを牢獄から出して、俺たちに渡せ！　グズ〳〵吐かすと、岩屋退治を始めようか』

マチ『サア、アナン、ユーズ其他の奴原、早くエスを此處へ連れて來い！』

アナン『ヤイ〳〵喧かましう言ふない。そんなことどこかい。今日は貴樣に負たおかげで、結構な酒を鰐腹のんで、精神恍惚こし、何にもかも忘れて了つて、極愉快になつてる所だ。天が下に酒さへあれば、別に敵だの味方だのと、せゝこましいことは

要らない。酒程親密なものはない。マア一杯這入つてやらんかい。どんなエライ喧嘩でも和睦には酒だい。人と交際するのに小むつかしい牆壁を設けるもんだない。世界同胞主義を盛に稱へられる今日だ。マア、エスはエスとしておいて、奥へトットと通つて呉れ」

キジ「貴樣はどこまでもヅー〳〵しい奴だなア。餘程俺達二人が恐ろしいと見ねるな」

アナン「そりやヅイ分恐ろしいよ。閻魔が亡者の帳面を操るよな面付をして、やつて來るんだからなア。オイ、キジ公とやら、何と云ふ七六つかしいシャツ面をして居るのだ。今の内に美顏術でも施しておかぬと、年が老つて皮が固くなり、皺が深くなつてからは駄目だぞ」

キジ「エヽ、要らぬことを云ふな。これから俺が岩窟内へふん込んで直接にエスの所在を調べてやらう。邪魔いたすと爲にならぬぞ。サア來い、マチ公！」

と云ひ乍ら、アナン、ユーズを始め、其他の者共を押分け、突倒し、窟内深く進み入り、遂には教主ブールの居間に侵入し、ブル〳〵慄ひて居るブールの素首をグッと握り、

キジ「サア、モウ斯うなつては駄目だ。何をブール〳〵慄うてゐるのだ。早く宣傳使のエスをこゝへ出さぬか」

マチ「ウラル教の親方、グヅ〳〵して居ると生首を引抜かれて了うぞ。お前は何時も此婆婆を穢土と云ひ、靈の國を天國淨土と云つて、憧憬してゐるのだから、今首を引抜かれて靈になり、天國へ行くのは滿足だらうが、何程天國でも、首がなくては駄目だ。サア早くエスの所在を白狀せぬか」

ブールは慄ひ乍ら

『ハイ今出させますから、一寸待つて下さい』

マチ『早く出せ、出し次第天國へ褒美として、昇れる樣にしてやらう。どうだ首を持つたなり、天國へ死んで行くのは嬉しかろ、アハ、、、。何と妙な敎だなア。人には死んでからの世界が結構だと云ひ乍ら、サア自分が死ぬと云ふ段取りになると、ヤッパリ厭だと見えて、ビリ〳〵慄うてムるワイ。そうすりやヤッパリ、口と心と裏表のことを言つてゐるんだなア。俺達も今迄はウラル敎の熱心な信者であり、二度もこゝへ參り、お前をこんな腰拔とは知らずに、活神さんだと思つて跪き拜んで居つたかと思へば、馬鹿らしうなつて來た。サア俺達の案内をしてエスの所在を知らせ。隱し立てをすると最早了見はならぬぞ。俺達二人に夜前の樣に數百人もやつて來て泡を吹き逃げ散る樣な弱虫計り、幾万人連れて居つたつて、何になるか。どれもこれも酒にへべレケに醉ひ、今のザマは何だ。肝腎のアナンやユーズ迄が碌に舌も廻らず、腰はフラ〳〵になつて、ひよろついてるぢやないか。こんな事で、三五敎の我々に對し、挑戰するとは片腹痛い』

ブール『仕方がありませぬ。我々の命さへ助けて下さらば、エスを渡しませう』

と先に立つて行く。二人はブールを見失はじと飛耳張目十二分の注意を拂つて岩窟内を進んで行く。向うよりアナン、ユーズの兩人はヒョロ〳〵し乍ら卷舌になり、アナンはキジ公に、ユーズはマチ公にワザとにぶつかつた。其途端に、二足三足ヒョロ〳〵とひよつき、深き企みの陷穽に脆くも落込んで了つた。

『サア失敗つた！』とキジ、マチの二人は陷穽の中で無念の齒がみをなし、一生

懸命に神言を唱へて居る。ブールは陷穽を覗き込み、さも愉快げに

ブール「アハ、、、、氣の毒乍ら、萬刧末代、穴の底で木乃伊になる所まで辛抱したがよかろう」

アナン、ユーズの兩人は二人の落ちた穴を互に覗き込み、

「ワハ、、、、ても心地よいことだなア」

と罵詈嘲笑を逞しくして居る。エスを始めキジ、マチの三人の運命（フィたーロ）は果して如何なるであらうか？

（大正一一、八、一六、舊六、二四、松村眞澄錄）

附記

湯ケ島温泉

三伏の暑き夏の朝、河邊に立ちて水流を打見やれば心涼し。霧は未だ谷川の兩岸に立ち並ぶ種々の木立を覆ませて、朧なる向山の姿は、松や杉や楓雜木の青葉と入り交はり得も言はれぬ幻の樣な色彩を浮べて谷から谷へと動いて行く。湯本館の湯煙りは谷川の上を靜かに〳〵渡つて行く。

猫兒川と狩野川との出會つた景勝の地點に、一廓を作つて居る天城山麓の温泉場湯ケ嶋で、四週間を松村眞澄氏出口宇知丸と俱に靈界物語を口述筆記しながら過したのは實に壯快であつた。見上ぐる猫兒峠の頂きは今朝日が射し初めた時で、大空には紺碧の繪衣

を擴げて五色の光彩を照し、天城連峯の大きなうねりの太陽を背にしてコバルト色に長く續いて居るのが樓上から見にて、川の瀨に激する水音と峠を吹く風の音が耳につく。宿の主人や四五の信徒に伴はれて、朝早くより危い釣橋を渡ると直に山田の畔を昇る。柿栗の葉は青々と繁り、未熟の果が秋待ち顏に蒼い顏を曝して吾等一行を目送して居る。少し登つて下田街道に出た。朝の風は何となく氣分良く涼しい風は谷底から吹き來たり、日光の屆かぬ山路を辿る身は、夏の日を忘るゝ位である。杉の木立の多い山に添ふて登つて行く。谷川を隔てゝ雜木の靑葉が色々と濃厚の彩を見せるばかりで、風に吹かるゝ薄の刃が、さら〳〵と音を立てゝ波の打つやうに靡いて居る。一面に蒼黑い草の色がうね〳〵と續いて、右と左に高い山が山の上から上からと頂きを現はして來ると、眞蒼に晴れた空にふわり〳〵と白い煙のやうな雲が浮んで來る。新道から舊道へ外れる

松の二三本ある處を上ると一面の原野で、萩や薄や龍膽の葉が元氣よく風にひるがへつて小ダンスを始めて居る。中に一筋の細い小道が通つて、それを四五町許り登ると清瀧近道の石碑が建つて居る。稍平坦な草原續きの露を分けて又もや四五町右に取つて行くと、ダラ〳〵下りになつた坂道に靑々としたくぬぎの林があつて、其下は深い谷川で物凄まじく木魂を返す水の音が山々に廣がつて居る。松の老樹が危げに谷に倒れかゝつて居るのを飛び越にて進んで行くと、僅かに脚を入れる位の羊腸の小徑に團子石がゴロリ〳〵と轉がつて居て、歩む度に谷川へ落ちて行く。木の根に縋り蔓を傳ひ下へ下へと二町計りも降ると、直に狩野川の上流の瀧で、一尺以上もあるヤマメの集まつて居る瀧である。安藤、杉山、福井氏等が二三日前に料理して差し上げたのは此瀧で捕獲したヤマメだと愉快氣に話しつゝ行く。

此處は狩野川の上流の瀧で、二十丈に餘る飛瀑は薄曇りになつた大空の反射を受けて鼠色に崩れ落ちる勢で木の葉や枝が夏の谷風にあほられてひるがへるのが、如何にも見事である。茲でしばらく休息して再び元來し道へ歸つて、それから又舊道を登る。山道の左右に雜草が茂つて風になびきつゝ一行を招いて居るやうな心地がする。次第々々に山の頂上から雨雲が出て來た。湯ケ嶋新田の小村はモウほつり〳〵と雨が落ちて居る。委細構はずどし〳〵と山路を登る。松や樅が一面に生茂つた山を隔てゝ谷底の水音を耳にしながら木小屋を一つ通り越すと、道は眞直に果ても無く續いて雜木の先は雨に濡れて冴え〳〵しい色をして居るのに、平素から蒼白い顏の宇知丸さんは一層蒼い顏になつて居る。林靜子浪子の紅裙隊も今日は何となく元氣が薄いやうな感じがした。小禽の囀る聲に送られて、右滑澤道と書いた木標を右へ下を見下しながら行くと、粉の樣な雨の中に水車をかけて木を挽き割る小屋が小さく霞んで、覓や水車や谷川の流れが面白い俯瞰圖を描いて居る。

二三町行くと出水の山道に出る所を通ると大川端と云ふ所に着く。これから先は天城山中の最も嶮しき所となる。檜の暗く茂つた谷間に一歩踏み入れると、何れの樹木も皆苔厚く蒸して木々の雫は雨よりも多く、生々しい草木の匂ひが濕つぽく鼻を突いて來る。右も左も見上ぐる許りの絶壁に包まれ、曇つた空の雨雲が蔭のやうに頭上を走つて居る。道もロクに無い中を分けて行くと谷底に出た。此處には大きな岩と岩とに掛渡した丸木橋があつて、それを危く渡ると又もや這ひ上るやうにして絶壁を登らねばならぬ。明治四十二年の山崩れに押し倒されと云ふ大木が、未だに岩と岩との間に挾まつて居るのを傳つて、僅かに岩の上に這ひ上ると、さつと吹き來る山風が峰の木々を吹き廻すので自

然の舞踏が演ぜられる。

此山路を登り切ると天城山隧道の北に近いので、早幾重にも下になつた連山が雨雲の動いて行く間から頂上だけを出して空の灰色と雲の灰色と山の黒ずんだ色とで色は冴えて居ても、雨に霞んだ夢の樣な木々の色が繪に描くには極めて面白さうに感じられた。北口の茶屋で一寸休息の後湯ケ嶋に出立しようとした時、右も左も一面の露で四五間さきの立木でさへもぼんやりとして谷は勿論空と山との境さへ見えず、只茫々漠々たる露の海を夢路の樣に迷ふのであつた。一行は一日の光陰を有意義に費やして、夕方の空に湯本館側の大本臨時教主殿へと歸つて來た。

大正十一年八月十五日

瑞月

天津祝詞解

高天原に神留坐す、神魯岐、神魯美の命以て、皇御祖神伊邪那岐命、筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に、御禊祓ひ給ふ時に生坐せる祓戸の大神達、諸々の枉事罪穢を拂ひ賜へ清め賜へと申す事の由を、天津神國津神八百萬の神達共に、天の斑駒の耳振立て聞食せと恐み恐みも申す。

△高天原。全大宇宙。詳細は「大祓祝詞解」を見よ。

△神つまります。陰陽二元が實相充實した上にも充實すること。

△神魯岐神魯美。陰陽二系を司る神々。

△命もちて。言靈によりての義。爰までは略ほ大祓祝詞解中に説明して置くつもりだか

ら詳しくは述べない。

△皇御祖　皇は統る也。澄む、住む等皆同一語源から出づ。水や空氣が澄むといふのは混入して居た物體の間に統一が出來、安らかに鎮定する事である。人がこの世に住むといふのも矢張同一意義で大主宰者の統治の下に安住する義である。若しそれが現在の世界の狀態の樣に理想の大主宰者を失つて居ると、世は亂麻の如く亂れ、人の心は濁り、人民は流浪に立つて四散する、所謂住むに住まれぬ事に成る。御(ミ)は体の借字、祖は祖神である。

△神伊邪那岐命　神(カム)は酒を釀むのカムなどゝ同義を有し、宇宙萬有を釀造し玉ふ伊邪那岐命樣に冠したる形容的敬語である。伊邪那岐命樣は、火系(陽系)の御祖神で宇宙に於けるあらゆる活動の根源を司り、大修祓大整理は常に此神の御分擔に屬するのである。地の世界(顯の幽界)に於て伊邪那岐命の御仕事を分掌し賜ふのが詰り國常立尊で、神諭の所謂世の大立替といふのは大修祓決行の事なのである。宇宙間に起る事は地球の内にも起り、地球の内に起る事は宇宙全體にも影響を及ぼす、兩々關聯不離の仕掛になつて居る。更に進んで小伊邪那岐命の御禊祓は一國一郡にも起り、一鄕一村にも起り、一身一家にも起る。表面の字義に拘泥して伊邪那岐命樣が九州の橘小戸の阿波岐原といふ所で、御禊を行はれ、そして祓戸四柱の大神達をお生みに成つたなどゝ解釋すると、更に要領を得ない。一層詳しき事は大祓祝詞に出て居るから是非參照されたい。

△筑紫の日向　古事記岐神禊祓の段と同一筆法である「是以伊邪那岐大神詔。吾者到二於伊那志許米志許米岐穢國一而在祁理。故吾者爲二御身之禊一而。到二坐筑紫日向之橘

小門之阿波岐原ニ而禊祓也。故於ニ投棄御裳ニ所成神名。衝立船戸神。……」云々とある是也。『古事記』が表面の字義の解釋で分らぬと同樣、この祝詞も亦分らない。筑紫は盡しである、究極である。完全無缺、圓滿具足である。數で云へば九である。筑紫が九州に分れて居るのもそれが爲である。無論筑紫とか九州とか云ふ地名が先きに起つたのでなく、地名は、後で附けられたので、本來は筑紫も日向も天地創造の際からの語である、地球の修理固成が出來ぬ以前から成立して居る言靈である。日向は光明遍照の義で（ヒムカシ）と同一語源である。

△橘の小戸　これも地名ではない。タチは縱の義、ハナは先頭の義、即ち先頭の縱行たるアイウエオの五大父音を指す。小戸は音（おと）である、言靈である。宇宙間は最初五大父音の言靈の働きによりて修理固成が出來たのである。

△阿波岐原　全大宇宙間の事をいふ。一音づつ解すれば、アは天地、ハは開く、ギは大中心、ハラは廣き所、海原の原なりと同じ。

△御禊祓　身体の大修祓の事。

△祓戸の大神達　祓戸四柱神、即ち瀨織津比賣、速秋津比賣、氣吹戸主、速佐須良比賣の四神である。凡て大修祓執行に際しては八百萬の神々は常に此四方面に分れて活動を開始し、諸々の枉事罪穢を拂ひ清め給ふので、天津神たると國津神たるとを問はず又宇宙全體たると、地球全體たると、又一鄕一村一身一家たるとを論ぜずして、四方面の修祓が起るのである。地球の大修祓、世の大立替が開始さるゝ時には、神諭の所謂雨の神、岩の神、風の神、地震の神の大活動となる。

△天の班駒　一音づつ解すればアは力、チは靈、コは體、マは全きの意。

△耳振立て聞食せ　活働を開始し玉への意。單に耳で聞くといふよりは遙に深遠な意義が籠れる句で、きくは辯口がきく、鼻がきく、手がきく、眼がきく、幅がきく、融通がきくなどのきくと同じく活用發揮の意味である。

【大意】　宇宙天地萬有一切の大修祓は、靈系の御祖神の御分擔に屬する。現在『地の世界』に於て執行されつゝある國祖の神の大掃除大洗濯も詰まり宇宙全體としては伊邪那岐命の御仕事である。幾千万年來山積した罪穢があるので、今度『地の世界』では非常な荒療治が必要であるが、これが濟んだ曉には刻々小掃除小洗濯を行へば宜しいので、大體に於ては嬉し〳〵の善一ッの世の中に成るのである。即ち伊邪那岐命の御禊祓は何時の世如何なる場合にも必要あるものである。これがなければ後の大立直し、大建設は到底出來ない譯である。

さて此修祓は何によりて執行さるゝかと云ふに、外でもない宇宙根本の大原動力なる靈體二系の言靈である。天地の間（即ち阿波岐原）は至善至美、光明遍照、根本の五大言靈（アイウエオ）が鳴り亘つて居るが、いざ罪穢が發生したと成ると、言靈でそれを訂正除去して行かねばならぬ。人は宇宙經綸の重大任務を帶びたるものであるから、先頭第一に身魂を磨き、そして正しき言靈を驅使すれば、天地も之に呼應し、宇宙の大修祓も決行される。其際にありて吾々五尺の肉體は小伊邪那岐命の御活用となるのである。雨を呼べば土砂降りの大雨が降り、地震を呼べば振天動地の大地震が搖り始まる。これが即ち『御禊祓給ふ時に生坐せる祓戸の大神達』である。かくして一切の枉事罪穢は拂ひ清めらるゝ事になるが、かゝる際に活動すべき責務を帶びたるは、八百萬の天津神、國津神達でこれ以上の晴れの仕事はない。何卒確り御活動を願ひますといふのが、

大要の意義である。何人も日夕之を奏上して先づ一身一家の修祓を完全にし、そして一大事の場合には天下を祓清むるの覺悟がなくてはならぬのであります。

デモ國・民歌

瑞月

日本人は日本人を
善惡正邪に拘はらず
賞讃すれば良民と
認めて呉れるが苟くも
缺點擧げて論ずれば
眼をば怒らせ肩を張り
非國民種と扱はる

デモ國民歌

是は果して日本人の
清き態度と云はれうか
公平無私で自分等の
身の缺點を批難して
自省せなくちや成らうまい
愛神愛民稱ふれば
直に赤化非國民
解放自由も其の通り
國民滔々自覺して
文化運動に共鳴すれば

是また直に非國民
日本に日本人なしと
慷慨悲憤を裝ふなり
元來日本の神民は
寛仁大度同化力
なければならぬ神の裔
見よや國祖の大神は
皇運隆々天壤と
共永久と詔り玉ひぬ
天地を廣く開拓し

自國の短所を取り除き
他國の長所を採用し
六合を齊うすべきなり
決して内訌や小競合
なすべき時代に非ざらめ
我が缺點は喜んで
根本的に改善し
民は君をば本として
誠を啓き人類を
愛撫し國利を興さしめ

世界共通の幸福を
一つにするは日本人の
天地自然の道ぞかし
國民外交の眞意義を
忘れんとする國人は
世界の國より排斥を
受くるも何の辭かあらん
七千餘萬の同胞の
革正すべきは今なるぞ
ア、惟神々々

御靈幸はへ坐しませよ。

‖海洋萬里(巳の卷)終‖

大正十二年九月十日印刷
大正十二年九月十五日發行

不許複製

海洋萬里巳の卷奥附

定價金壹圓五拾錢

京都府何鹿郡綾部町字上池田二七番地
編輯者 櫻井重雄
京都府何鹿郡綾部町大字神宮寺一番地ノ一
發行兼印刷者 近藤貞二
京都府何鹿郡綾部町字本宮東四ツ辻十三番地
發行兼印刷所 天聲社
【振替大阪六〇五三四】

▽豫告

海洋萬里（午の卷）九月十日發売の豫定
海洋萬里（未の卷）九月廿五日發売の豫定

海洋萬里【午の卷】目次

序歌……
総説……

第一篇　千狀萬態

第一章　主一無適……
第二章　大地震……
第三章　救世神……
第四章　不知戀……
第五章　秋鹿の叫……

第六章　女弟子……

第二篇　紅裙隊

第七章　妻の選擧……
第八章　人獸……
第九章　誤神託……
第一〇章　噂の影……
第一一章　賣言買辭……
第一二章　冷い親切……
第一三章　姉妹教……

第三篇　千里萬行

第一四章　樹下の宿……
第一五章　丸木橋……
第一六章　天狂坊……
第一七章　新しき女……
第一八章　シーズンの流……
第一九章　怪原野……
第二〇章　脫皮婆……
第二一章　白毫の光……

第四篇　言靈將軍

第二二章　神の試……
第二三章　化老爺……
第二四章　魔違……
第二五章　會合……

海洋萬里(午の卷)目次終

申込所　丹波綾部町　天聲社
振替口座大阪六〇五二七番

王仁文庫（全十篇）

出口瑞月氏が神授の大經綸と天來の大抱負と、縱横の大神機と時に應じ機に臨みて、隨所に閃發せし文章詩歌其他二十有餘年間積んで山をなす。乃ちその中より、精粹を拔き、珠玉を選び、序を正し類を纂め、王仁文庫と題して茲に刊行の機運に向へるは誠に時代の急迫の然らしむる所にして、實に百萬讀者の渴望を醫する神液甘露たりと謂ふべし。

王仁文庫
第一篇

皇道我觀

定價　金五拾錢
郵税　金貳錢

「皇道我觀」は皇道の眞髓を縱說橫論し、世道人心の歸趨を指示せる大文字にして皇國の臣民たる者の必讀の名著たり。

王仁文庫
第二篇

國教論集

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

本篇には「國教樹立論」「信仰の墮落」「皇國傳來の神法」「太古の神の因緣」の四篇を收む。皇道の眞髓は一貫して漲り溢れ、國教は腐敗し信仰の墮落して其極に達したる混沌の現今を救ふは本篇に依らざるべからず、太古の神々の因緣は必ず見落す勿れ。

王仁文庫
第三篇

瑞能神歌

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

瑞の神歌は裏の神諭にして仁愛大神の人類に與へられたる神示なり、方舟なり、救世の綱なり、すみやかに起りつゝあり亦速やかに起るべき大地獄道の火焰をまぬがれんとせば、本篇を見よ。叩かざれども開かれし救の門、求めざれ共仁慈の神は之れを與へられぬ。迷ふ勿れ!!來れ!

王仁文庫
第四篇

記紀眞解

定價　金五拾錢
郵稅　金貳錢

世に國學者を以て任ずる者徒に多しと雖も、眞の古事記を解する者一人として無し、日本書記を解する者亦あるなし、之れ其內義を理解する能力なき爲めなり、本篇は「古事記」の一節及び「日本書記」の一節を解釋し密義を發現されしものにして現代と併せ解釋され必ず何人も肯定する樣平易に解かれしもの也